



あ 0 お 1 き 国立ハンセン病資料館（東京都東村山市）とリデル、ライト両女史記念館（熊本県熊本市）とに共通する展示に、青木恵哉（1893 年～1969 年）の肖像写真がある（上掲写真最上段右から 3 枚めのパネルに青木の肖像写真）。どちらも彼の顔写真に解説文をつけたパネルのほかにも展示品があり、前者では「青木が書き遺した〔中略——引用者による。以下同〕『選ばれた島』初版本」をみせ、後者にはその英訳書 Mission to Okinawa がある。この小文では、前者のひとつの読み方を示すこととする<sup>2)</sup>。

1) 本稿は、2014 年度後期滋賀大学内地研究員制度、2014 年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究、福武財団第 9 回瀬戸内海文化研究・活動助成、日本学術振興会 2014 年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号 26370788）による研究成果のひとつである。

2) 青木についてわたしたちが執筆した稿に、阿部安成「青木恵哉の信仰—移動する療養者」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.193、2013 年 6 月）、同『島で—ハンセン病療養所の百年』（サンライズ出版、2015 年、第 V 章）、阿部、石居人也「わたり、わたす、書く、つなぐ—青木恵哉という時空」（阿部、石居監修、解説『選ばれた島』リプリント・ハンセン病療養所シリーズ 1、近現代資料刊行会、2015 年 4 月刊行予定）がある。また本稿と組みとなる稿に、阿部安成「復刊事情—ハンセン病療養者の著作『選ばれた島』をめぐる」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.223、2015 年 3 月）、同「人物誌を整

あ 0 お 2 き      まずは、『選ばれた島』と題された書籍の書誌情報を示す。

奥付をみよう——「印刷」年月日が 1958 年 10 月 15 日とあるも、発行年月日の記載はない。著者が青木恵哉、発行者が W.C.ヘフナー、印刷者が東京都千代田区神田小川町の坂田好雄と記されている。奥付端に社名がみえる協進印刷製本の社長が坂田だという（「あとがき」）。本書は「非売頒布品」とのことで、頒布元として「沖縄・那覇市大道 212-1/沖縄聖公会本部」が示され、「日本取次元」に東京都渋谷区の日本聖公会教務院があげられている。「沖縄・那覇市」「日本取次元」の表示に、このとき米国軍政下にあった沖縄のようすがあらわれている。ヘフナーの名のうえに沖縄聖公会本部と同じ所番地が記されているので、彼は同会本部のひとなのだろう。

これが小稿で読む書籍のいわば id 情報となる（以下、本書、とは『選ばれた島』を指す）。

つぎに本書の構成をみよう。書名題字扉はなく、表紙をめくるとまず「教母ミス・ハンナ・リデルの霊前に捧ぐ」との献辞ページがあり、ついで「癩者の慈母」と形容されたリデルの肖像写真、イザヤ書から聖句の引用、米国聖公会ホノルル教区主教・沖縄聖公会管理主教ハリー・エス・ネケデーの「推薦の言葉」、「著者近影並に自筆」の一句、そして目次となる。目次と本文のあいだに口絵があり 2 葉の写真が載る。本文にも挿絵として写真が載るページがある。「あとがき」によると、本書に「挿入」された写真は「初代園長塩沼英之助先生や、鬼本司祭さまその他から戴いた」とのこと。本文に掲載された写真の 1 葉には、「愛樂園の伝道に献身する鬼本司祭と筆者／（礼拝堂祭壇前にて）」とのキャプションがつく（254 ページと 255 ページのあいだ。以下本書からの引用にあたってページ数を記すときは、たんに（254・255）と（ ）のなかに数字を示すこととする）。

なお、目次では「推薦の言葉」と本文のあいだに「序」があることとなっているが、実際にはそれはない。

全 29 章（章に番号はふられていない）で編まれた本文のあとに、「附記」（署名なし）、「あとがき」（恵哉）がある、全 269 ページの書籍が『選ばれた島』なのである。

あ 0 お 3 き      「推薦の言葉」でその執筆者は、「みづから身体的な困難がある上に、強える—ハンセン病療養者青木恵哉の描き方」（同前 No.224、2015 年 3 月）がある。

烈な迫害をものともせず、「空陸からの砲爆撃にさらされながらも神への信頼を決して失わず、病気によって蝕まれた身体で」と青木を形容している。そうした青木が、「傷つける人々、家なき人々、死に瀕する人々に、神のほんとうの慰めと力を得させようと」したこと、「沖縄の洞窟にうごめく多数の病友とともに、愛にみちた彼ら自身の樂園を建設してきた」ことを記した、「彼のこの半生の物語」が本書なのだと説いている（傍点は引用者による。以下同）。

2 ページにわたるこの「推薦の言葉」で執筆者は「病友」「病友たち」の語を3箇所記している。これは療養所内でごくふつうに用いられた語で、学友、級友、戦友、僚友といったたぐいの用法である。『広辞苑』（第6版）には、「病友」と「療友」の語があり、前者は「病気をしている友」、後者を「共に療養する仲間」とある。療養所では一般に「病友」の語には両者の混淆のようすがあり、病み、いくぶんかの治療をうけ、養生をこころがけつつ、みずから生きる場を整えあう仲間、あるいは趣味を同じくする、似たような興味関心がある、郷里が同じだというときにもその名で呼ぶことがあるというところだろう。ただし、かならずしも「共に」を含意しない用例もみられる。暮らす療養所をべつにしても、「病友」というときがある。このばあい友は同じ療養所、同じ空間にいるとかざられない。

さきの引用部とつぎ——「病友たちは死に臨むとき、いつまでも青木氏の側近くありたいと願っています。それは彼自身が幾度も死にさらされ、病友たちとも生死を共にして来たからにちがいません」の箇所をみると、青木を敬慕する「病友たち」、「病友たち」とともに生きた青木について記されたわずかな記述には、青木と「病友たち」とのあいだにあるいくらかの分離が意識されているようにうかがえてしまう。

青木が慈愛を向け、信仰を説いた相手である病者たちは、青木にとって病とそれをめぐる事態を介した友なのだろうし、青木を仰ぎ慕う病者にとってもそのかぎり青木は友なのだろうが、そうした両者をみたときに、青木と「病友」とが区別されている——べつに言えば、青木は「病友」のなかには入っていない、「病友」のなかに青木はいないかのようなのである。あらかじめここで示すと、これが本稿の論点となる。

あ0お4き 「救いを求めて」(1) と題された最初の章では、冒頭の1行で青木の生

年月日と出身地をみせ<sup>3)</sup>、ついで家族のこと、幼少のころのこと、そして「思いがけずも癩におかされしまった」と記述が始まり、最終章では「愛楽園の誕生」(251)の章題のとおり、「ここに国立癩療養所国頭愛楽園が誕生する」ところまでが描かれ、「愛楽園創立以後については、また、適当な時機にペンをとりたい」と「附記」されて本文が閉じられた。

本書は、青木の出生から沖縄本島最初の癩療養所の開設にいたるまでの経緯や展開を、「私」の視点や観点から描いた書籍なのである。

「あとがき」は、本書のなりたちをたどる——「当時愛楽園の職員上原信雄先生（現那覇市歯科医）が来られ、「沖縄救癩史の<sup>〔マ〕</sup>沿革についてぜひ書き残して置くように」と話された」ことが発端になったという<sup>4)</sup>。ここにいう「当時」とは、「一九四五年五月〔中略〕愛楽園の焼跡の灰の上に座って」から「その後、暫くしてからのこと」とのこと。「あとがき」には縷々、本書上梓にいたる過程が記録されている。

上原による執筆の勧めがあつてから、青木は「禿筆に鞭打って毎日上原先生のお話になったことを書きつづけ、それが「かるばりの道」と題する三七三枚の原稿となった」というとき、「上原先生のお話になったこと」とはなにかが曖昧であるが、これはおそらく、青木が上原の口述筆記をおこなったということではなく、上原がいった「沖縄救癩史の<sup>〔マ〕</sup>沿革についてぜひ書き残して置くように」との勧めを指すのだろう。もっと狭めていえば、「沖縄救癩史の<sup>〔マ〕</sup>沿革」ということだ。沖縄における「救癩」の歴史とは、療養者自身が療養所建設を必要とした、それが療養所建設に結実した、となる。

この 373 枚の原稿は、1954 年 11 月に日本聖公会総裁主教に「出版して戴くようお願いして」渡したという。すると 1 か月ほどしたところで、「あの原稿は英訳して出版してあげます」との「思いがけないお話」が「ヘフナー司祭さま（沖縄聖公会主任）」からあつた

---

<sup>3)</sup> すでにべつに書いたところをくりかえすと、本書は 1972 年に「復刊」され、その編者によって巻末につけられた年表では、青木の生年がまちがって記されている。ずいぶんと粗忽な編者による 1972 年版を読むときはその年表や後注にみえる誤った記述に注意しなくてはならない（1972 年版については前掲阿部「復刊事情」参照）。

<sup>4)</sup> 「私にとっては生命の恩人」（「あとがき」）という上原がかかわった書籍に、『沖縄救らいの歩み—沖縄愛楽園開園二五周年記念誌』（発行沖縄らい予防協会 上原信雄、1963 年）、『沖縄救癩史』（発行者上原信雄、発行所沖縄らい予防協会、1964 年）がある。

ので、「雀躍して喜」ぶ。このヘフナーが、本書の発行者となる人物なのだろう。この記述につづいてすぐに、「出版社に送ってあった原稿は早速取り戻して戴くことにし丹念に読み返して見た結果、大きな欠陥のあることを知り、どう考えても活字にする価値のないことがわかった」と明かされたのだった。

**あ 0 お 5 き** このあたりは原稿のゆくえがよくわからない曖昧な記述になっている。373枚の原稿は、出版社と日本聖公会総裁主教との二手に送られたのだろうか。後者のかかわりで英訳書を出版するみとおしがついたので、前者に送った原稿をとりさげたということなのか、よくわからない。おそらくヘフナーのいう英訳出版もすぐには進まなかったのだろう。ヘフナーがいう英訳書が出版され、ついで和書『選ばれた島』が刊行されたわけではない。

さきにあげた、リデル、ライト両女史記念館1階に展示されている *Mission to Okinawa* は、その発行年がよくわからず、一般には、おおよそ 1970 年代の発行と示されている<sup>5)</sup>。翻訳者がだれかもわからないこの洋書は、香港の *Christian Book Room* から出版された。それと本書の目次を対照したところ、ほぼ逐語訳といってよい翻訳となっていた。

活字出版の価値はないが、さりとて、「これを再編するの自信はな」い青木は、「窮状を畏友宮良保氏に訴えた」ところ、「当時、氏は療養中にも拘らず、私の苦衷を察し、快くこれを承諾して援助を惜ま」ず、「眼疾によって視力を冒され」ながらも、「一年有半の静養によって快復し、再びペンを執ってこれを完成さ」せたとのことである。

なお、本書は少なくとも、わたしが所蔵する古書店購入本と、国立療養所沖縄愛楽園の沖縄愛楽園自治会が所蔵する金城幸子署名本は、本書を完成させたという、青木が尊ぶ畏友の名は、行間にスタンプ押印によって示され、本文の当該箇所は黒く塗りつぶされている。石居人也の教示によると、沖縄県立図書館所蔵本には、このスタンプ押印も黒塗りもなく、元の活版印刷による畏友の氏名がわかるという<sup>6)</sup>。また、わたしが確認したところでは、国立ハンセン病資料館には、青木自身が多磨全生園医師の林芳信に寄贈した一冊があ

<sup>5)</sup> たとえば国立国会図書館 OPAC では発行年の表示が [197-?] となっている (2015年4月9日検索)。

<sup>6)</sup> 前掲阿部、石居「わたり、わたす、書く、つなぐ」の石居執筆分。

り、それもまた黒塗りもスタンプ押印もない、元の活版印刷のままだった。

本書は青木の畏友の名をめぐって、それが元のままの版と伏せられた版との二様があることとなる。どちらの版の冊数が多いのか、後者はいつの時点での処理なのか、それらはわかっていない。

**あ0お6き** 活字出版に値しないと青木自身がいったんは否定した 373 枚の原稿は、その名がなにかはともかくも、「氏〔ひとまず、宮良、とする〕によって整備せられ、脱稿するにいたったことは誠に感謝に堪えない」と青木自身が明示したとおり、本書は青木が書きあげた原稿が、同じく療養者である宮良の手によって「整備」「脱稿」されてようやく、活版印刷にまわせるほどに仕上げられたというのであった。

ただし、「あとがき」では、いわば宮良の入れた手がどのていどだったのかは示されていない。そうではあれ、厳密に言えば、本書の奥付には著者の名にくわえて、編集または校閲をおこなった宮良の名も記さなければならなかったはずなのである。それが記載されないままに、「あとがき」で本書は青木と宮良の共同作業の成果だと告げられたのだった。

青木の意味か宮良の意向かは不明ながら、本書の元原稿「「かるばりの道」には戦災から復興にいたるまでのことも記してあったが、本書はこれを削除して愛楽園の誕生までとし、また題名も、これを「選ばれた島」と改めた」という。「あとがき」のさきを読もう。

こうしてできあがった本書は、「教会は近く開教百年祭を迎え、またロンドンではランベス会議によって、全教会が一つとなる機運が高まりつつある時、愛楽園では創立二十周年を迎えて記念の祭典が行われんとするに当り私は受洗四十年の恩寵を回顧し、感激に咽びながら貧しい内容ではあっても本書を世に送ることができたことは感謝に堪えない」と、いくつもの記念のなかにおかれて、『選ばれた島』はその刊行がよろこばれたのだった。

重層する記念と祝賀のなかで出版された本書は、療養者である青木と宮良のふたりの手を経て世にあらわされた、ひとまずは、沖縄の療養所開設譚なのである。

「あとがき」によれば本書はおおまかには、1945 年から 1954 年までに執筆されたこととなる。ただしそのあいだのいつなのかはよくわからない。本書『選ばれた島』は、1893 年 4 月 8 日（青木「生まれ」）から 1938 年 2 月 1 日（国頭愛楽園「誕生」または沖縄 MTL

相談所政府「移管」ないし 1938 年 11 月 10 日（国頭愛楽園「開園」）までをその内容として、さきにあげたあいだのどこかで、つまりはすべて事後に、執筆され、いったん青木が脱稿したのちにさらに宮良の手によって（どこがなのかは、ひとまず、わからない）<sup>7)</sup> 整備、脱稿されたものである。およそ 45 年の時間に生じた出来事はあらためて、「私」の観点によって組まれた「物語の進行」（259）にそって展開が再構成されている。

**あ 0 お 7 き** 本書にはときおり、その時点では（遅くとも 1938 年の時点では）知り得なかつたりまだ生じていなかったりすることがらが記され、それを事後に「私」が記録していることがあらわれている。たとえば、青木が 1916 年に入ったという瀬戸内海の療養所が「大島青松園」と記されたり（その名称は 1941 年に登場）、同所で創刊した逐次刊行物の廃刊を示したり（それは 1940 年のこと）といったぐあいで、各所の記述をとおして、本書全体が事後の記録であることをあらわしてしまっているのである。この点が本書を読むときの注意事項第 1 となる。当然のことながら、本書は即時記録や速記録ではなく、すべて「私」が実見した記録でもないことを確認しておこう。

また本書は、ごく一般に流通しているであろう意味（ここでのひとつの論点は真実と虚構）でのドキュメンタリーでもルポルタージュでもない<sup>8)</sup>。なにをとりあげないのか、記録することがらをどのような筋立てで整えるのか、それも「私」の観点からおこなわれている「物語」（「推薦の言葉」）<sup>9)</sup> なのである。もとよりケネデーは、なにか明確な意思をもって、本書を「彼のこの半生の物語」と「推薦の言葉」に記したわけではないだろう。そうであってもここではともかくも、本書が「私」がこしらえた物語<sup>おはなし</sup>であることを、それを読む前提におきたいのである。

**あ 0 お 8 き** 本文ではまず、「明治二十六年（一八九三年）四月八日、私は四国の片田

---

<sup>7)</sup> 沖縄愛楽園自治会にある原稿、国立ハンセン病資料館にある原稿複製については稿をあらためて記す。

<sup>8)</sup> ここではもとよりドキュメンタリーやルポルタージュが真実の記録だといっているのではない（森達也『それでもドキュメンタリーは嘘をつく』角川書店、2008 年、初版 2005 年、参照）。ハンセン病をめぐるドキュメンタリーに対するわたしの批評の一端は、阿部安成『透過する隔離—療養所での生をめぐる批評の在処』（滋賀大学経済学部、2014 年）第 3 章を参照。

<sup>9)</sup> 試みにこの「物語」の訳を英訳書にみようとしてもそこに「推薦の言葉」はなかった。

舎で生まれた」との書きだして、「私」の物語を始めている。「救いを求めて」と題された最初の章では、16歳の発症のようすがふりかえられる。それを「恐ろしい不幸な病気の初めであった」というものの、「しかし、その時それと気付いたわけではなく、青天の霹靂のように癩の宣告を受けたのはそれから幾月か後のことである」といいながらも、そのおそらく医師による「宣告」のようすは記録されていない。「私」にとっては、「右手の指間に小さい一つの肉刺を発見」<sup>10)</sup>したときの方が、おそらく医師による「宣告」よりも大きな自己の転換とかえりみられたのだろう。この「肉刺を発見」したことを経て、「私」は自身の意思や希望とはかかわりなく、それまでの自己とはべつなものに変えられてしまったのである。

こうした「私」の心身の変容をどうあらわそうか形容しようか、わたしはそれを考えめぐねている<sup>11)</sup>。本稿ではひとまずそれを〈変現〉と呼ぶとしよう。

指に小さいひとつの肉刺を見つけ、ハンセン病を発症したと告げられたことにより青年の「私」は、「わが家の悲劇の因が自分自身にあることを知り、ついで「苦しみ悶え」、そして「神仏に頼る心が芽生えた」という心身の大きな〈変現〉を体験した(2-3)。この病が不治とわかったときに「はじめて信仰に目醒めた」とたどられ、さらに症状が悪化すると「お四国詣りの旅」にでるほどに、それが自己を〈変現〉させたと記したのだった。

本書にはこのわが身の〈変現〉という筋立てがある。これが本書を読むときの注意事項第2となる。これは「私」という療養者の半生をとおした〈変現〉の物語なのである。

**あ 0 お 9 き** 四国詣りをくりかえしても快方に向かわないからだを持てあましつづあるとき、「癩予防に関する規則ができ」たという(9)。それは、1907年公布、1909年施行の法律第11号「癩予防ニ関スル件」を指す。その法施行により、「浮浪病者は見つか

---

10) 国立ハンセン病資料館所蔵の原稿複製をみると「肉刺」に「まめ」とルビがふってあった。

11) 青木と大島療養所のキリスト教霊交会でともに活動したことのある療養者長田穂波のこうした変容をめぐって「化生」「蟬蛻」の語を用いたことがある(阿部安成「死んだ穂波の横顔に一長田穂波探索」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.130、2010年4月、同「癩と時局と書きものを一香川県大島の療養所での1940年代を軸とする」黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010年)。



第癩療養所に強制収容されることになったので、療養所の実情を知らぬ病者達は、それは刑務所みたいなところにちがいないとか、あるいはまた、集めて殺すつもりかもしれぬなどと考えて入所を極度に恐れていた」と予防法下の事態がとらえられている。

ここに「病者」の語が初めて登場する。しかも、それは、「浮浪病者」と「病者達」とに分けられていたのだった。この病の当時の名称が「癩」である。ここであらかじめ提示すると、本書はその展開のなかで病者たちを区別してゆくこととなる。同じ癩という病に罹りながらも、それを発症したものたち、癩を病むものたちが「私」によって、「私」をとおして、「私」を介して、区別されるのである。これが本書を読むときの注意事項第3となる。本書には癩者を分割、分節する識別や類別の力が潜っているのだ。

おおよそは怖れられ忌避される療養所ではあるが、「病苦と疲労と寒さに万策つきた私は、進んで療養所行きを希望した」。1915年12月の雪の朝に、高松にある「仮収容所」に入ったところで、最初の章が閉じられた。

**あ1お0き** 第2の章「よろこび」(9)は、大島療養所がそこに記録される出来事の場合となる。「私」の乗った船の大島着岸が1916年1月下旬のことという。「患者舟が来たというので、たちまち病友が集まってわいわい騒ぎだした」という文に、本書本文最初となる「病友」の語がみえる。療養所におけるこの語の意味についてはさきに書いたとおり。

「警官の訊問」のような入所手続きを経て案内された重病棟で「私」は、「あるいは横たわり、あるいは座っていた」「異様な人々」を目撃し、「嘗て見たことのない形相ばかりである。実のところ、私は身の毛がよだった」との感じを持った。自分とは異なるものたちをみたとの謂である。ついで「新患の私を見に来た」「病友がぞろぞろ室へ入ってきた」。新人の「私」が観察されると同時に、その場にいるものたちを観察してゆく。そこには、「どう見ても病人とは受けとれぬような軽症者」、「多くは病勢はかなり進んでいる」もの、「ひどく不自由な者」、「重病者」がいる。さきの「異様な」と形容された人びとも、「口のまがった人、手足のない人、頭髪や眉毛のないつるつるした顔の人、咽喉結節で呼吸不能のため咽喉部に穴を開けて呼吸管を差し入れている人」と観察されていた。「病友」であれ「患者」であれ、そう呼ばれるひとたちが一様ではないことがあらわされている。さまざまな

患者たちは、同じ病に罹ってはいるが「私」とは違う、そうした「私」の心情がうかがえるところである。

他方で、「みんな、もちろんベッドの上の重病者までが、病気を忘れたかの如く屈託なく冗談をいい合っている」と一括りにされてそのようすが表現されることもある。ただし、「療養所の生活に慣れるに従って」、そのようすは「一皮むけば、生涯消ゆべくもない病苦に世を呪い、自らを卑下し、自暴と自棄の沸る表面だけの「明るさ」だったのである」ととらえ直される。こうした暗鬱さが、いずれ「私」を蔽うかもしれないとのいくらかの危惧や不安がうかがえるところでもある。

不治の病、普通病棟での「毎日の生活」、療養所の概要がたどられ、「一面宗教展覧会の観があった」という療養所の宗教が説かれる。ただし、「各宗派とも概してその信仰は低調であった」というその理由を、「病気の治癒を宗教に求めて酬いられなかったからである」と述べたうえでさらに、「神や仏に求めることが根本的に間違っていたのだ」との見解もみせてしまう。これは、当時そう考えていたのか、執筆時の考えなのか、それがわからない。

**あ 1 お 1 き** それはともかくも、「私」は真言宗の組織に属して、「念仏を唱えながらひたすら病氣平癒を祈願した」。しかし、「入園後一年近くなっても、私の病氣は、やはり快くならなかった」という。

「真の「明るさ」もなく、前途が暗澹とした療養所を記す章の表題が、なぜ「よろこび」なのか。それは、そのころに出会った「二人の病友」とのその邂逅が忘れられないほどに大切に幸いとなったからなのだろう——「その頃、私は二人の病友に異常な尊敬の念を覚え、深い関心をもち始めていた」——「二人とも熱心なクリスチャンであった」、三宅官之治と長田穂波との出会いである。もうひとり、療養所の「初代庶務主任」でキリスト者であるがためにその職を辞させられ、そののち「キリスト教伝道師」となった宮内岩太郎の名もあげられ、彼を「癩者の慈父」と称するのだった。三宅、長田、宮内、そしてのちの章に登場する、「私」に洗礼をさずけた宣教師のエリクソン（「エリクスン先生」）、療養所のなかの学校で「私」の教え子となった三人の子どもたち。彼ら彼女が大島での「私」の忘れられない大切な人びととなった。なお、大島療養所の「病友」でその名が記されたお

となは、三宅と長田のふたりだけだった。

大島ではとりわけ長田の勧めと支えによって、「私」は聖書を読みつづけていた。それが、「私は彼〔長田〕の言葉に勇気を得て」と解釈されている。このとおり本書をとおして、「私」はいくつもの機会に力を得たと記録されているのである。これを本稿では、〈装填〉(charge または equip) と呼ぼう。だれかに、なにかにつき動かされて、みずからが力を得るようすをわたしはこの語であらわしている。

あるとき、「聖書に読み耽っているとき、私は未だ嘗て味わったことのない大きな感動を覚えた」(18)——それは病む自己の再認識とでもいうべき体験で、「私の病気は恥ずべきものではない!、人の恐れ蔑むこの病気もまた神の業の顕れるために違いない!、私は神に選ばれているのだ!、〔中略〕健康のことなど最早問題ではない。病気が治ろうと治るまいと、神の御こころのままにそのみ業に携れるだけでも、こんな有難いことがまたとあろうか」と記述されたそれはまた、更新された、病む自己の意味でもあった。それをまた、「私の人生観は百八十度転換し、病苦は悦びに変じ、卑屈は影をひそめて満足がつねに私の心を満たすようになった。これは私の得たもっとも大きなよろこびである」とあらわされ、章題のゆえんが説かれたのだった。さきにかがえると記した危惧も不安も、信心により吹き飛んだというかのようだ。

聖書をとおして「私」はまた、いわば病を生きるものへと〈変現〉したというのだった。癩の不治が無化されたといってもよいだろう。治らないから恐ろしいだとか、それが治るようになったからよろこべるだとかいうのではなく、治らない病とともに生きるという展望の確保である。

**あ 1 お 2 き**      ここで、大島療養所の三宅、長田、宮内、エリクソンについての記述を確認しよう。本書では、三宅と長田が「園内のずばぬけて傑出した存在であった」(17)と特筆されている。「この二人の性格」が比較され、三宅は「温情型」で「比較的健康に恵まれていた」ため「園内政治に労働に主として園の動的方面に挺身」し、対して長田は「熱情型」で「身体が不自由であったので、もっぱら祈りと聖書研究に身を入れながら三宅さ

んの知恵袋となってその活動を助け」たとの人物評が示される<sup>12)</sup>。ふたりの「温」と「熱」とはほどよく調和して素晴らしい働きをし、「賭博・飲酒などの悪風は改まり、弱肉強食の風潮は一掃され、弱いもの——重病者・不自由者・老人子供が大事にされる楽園が築かれたのであった」との大島療養所観がみせられたのだった。

三宅についてはまた、「義務教育さえ卒えていなかったにかかわらず、博識」だとも評価され、長田もまた「まことに彼は熱血溢るる祈りの人、信仰の人であった」という。ここで三宅や長田を知るためのほかの記録を詳細に示すことをしないが、それらのなかには、三宅を「頭脳明晰という方ではないが」との評があったり（ただし読書を怠らなかったともある<sup>13)</sup>、「祈りの人」との讃はどちらかという三宅に向けられたものだったり（もとより長田の信仰も熱心なのだが<sup>14)</sup>）、と本書の記述とのあいだにいくらかの違いがみられ、あるいは長田には勇み肌ともいえる好みがあったこと<sup>15)</sup>が本書ではまったくふれられもしていないという、取捨なのか知らなかったのかがあらわれる様相がある。

**あ 1 お 3 き** さて、三宅たちが集った信徒団体であるキリスト教霊交会（以下、霊交会、とする）のようすを青木が記した稿に「恩寵の回顧」がある。霊交会創立 50 周年を記念して刊行された『霊交会 創立五十周年記念誌』（笠居誠一ほか編集委員、大島青松園霊交会、1964 年）に寄せた稿で青木は、霊交会の先達たちをふりかえり、「いつの集会でも三宅さんと、長田さんがリーダーになってみんなを教え励まし、親心でもつて指導してくれ」、また、「霊交会が最初に、三宅、長田、両氏のようなよい指導者をあたえられ、また、S・M・エリクソン、宮内両先生のよき御指導にも恵まれたことが何より幸いであった」と記していた。こうした記述から、これら 4 名を霊交会の指導者とみても早計にすぎる。青木自

---

12) さきにふれた本書の 1972 年版には同版編者による「解題」があり、そこで本書著者には「本書が外面の歴史であるのに対して、内面の歴史を綴った続篇を書きたいとの願いがあ」と伝えて（前掲阿部「復刊事情」）。そこにいう「外面」「内面」の内実が不分明なのだが、推察すると前者が政治や労働などの「動的方面」で後者が「祈りと聖書研究」ということなのかもしれない。青木恵哉は大島療養所において聖書研究を逐次刊行物に寄稿していたところもこの推察の根拠となっている（前掲阿部「青木恵哉の信仰」）。

13) 阿部安成「物語を解す—国立療養所大島青松園で結ばれたキリスト教霊交会の歴史記述」（『国立ハンセン病資料館研究紀要』第 4 号、2013 年 3 月）。

14) 前掲阿部『島で』。

15) 同前。

身がその稿で、「霊交会には会長というものがなく」と記していたとおりの会則が霊交会にはあったので、会の運営であれ信仰をめぐってであれ、それを担う長を霊交会はおかないこととしていたのだから。さきの青木の記述は、指導する特定の者がいたり役があったりしたというよりも、ほかよりは運営に長けていたひと、さきに信仰に入ったひとというくらしいの意味ではないだろうか。「指導者」という語はもっと硬くみえ、きっちりとした役割を読むものにおもわせると危惧する。

ただし、本書で「園内のずばぬけて傑出した存在」と最大級の絶賛が寄せられた三宅と長田ではあっても、その近辺の記述で本書が用いなかった「指導」の語が、さきの青木の寄稿には記されていた。このわずか 2 字の小さな形容を無視すると、霊交会とあわせて療養者たちをふりかえる青木的心情を見誤ってしまうようにもおもう。霊交会記念誌へ寄稿したときの青木は 70 歳台になったところで、本書刊行からかぞえると 6 年のちのことだった。そうしたときにあらためて、初めてキリスト教への信心を持つ場となった霊交会をかえりみたとき、そこに沖縄愛楽園に生きてきたわが身の来し方を重ねあわせてみれば、どこか「指導」という語を用いたい気持ちがあったようにもうかがえてしまう——というわたしの憶測はいくらかセンチメンタルかもしれないが。

大島療養所を回顧してみると、そこでは「園内のずばぬけて傑出した存在」であるふたりの療養者信徒が「挺身し」「活動」し、「素晴らしい働きをした」ことによって、「弱い者」が「大事にされる楽園が築かれた」と「私」が総括していた。さきのセンチメンタルをここでもくりかえすと、そうした働きをまたここでもわが身に重ねあわせ、いま沖縄愛楽園がありそこがいくばくかでも療養者の安住の地になっているとしたら、それを築くにいたったなかにわが身の生をおいているようにも感じる。これは「私」の感傷でもある。

ただし、感傷といってよければそうした回顧する意思が、療養者のなかに「弱い者」をみつけている点を注視しておこう。もちろん、「重病者・不自由者・老人子供」にも強いものがいたといたいのではない。ついで括りに「病者」や「病友」といってしまうものたちのなかに、「園内のずばぬけて傑出した存在」と「弱い者」とがいた、あるいは、そうした分割と分節がみつけれられたということである。そうしたとき、「私」は両者のどちらにな

るのだろうか。

あ 1 お 4 き 第 3 の章「帰省して」(18)において、「私」の受洗が記される。その直前の箇所、療養所職員を辞職した宮内が高松市の「東教会」の牧師となって大島へも伝道に渡り、彼の「斡旋」でエリクソンがまた訪島することとなり、「われわれの宗教活動は次第に活発になった」と、ここに療養所内の信徒たちに宮内とエリクソンとをくわえた「われわれ」があらわされている。信心結合とでもいうべきつながりが観取されたのである。

洗礼にさいしてはいくつかの手続きが必要となった。多くの療養者が療養所では「偽名」を用いる。偽名での洗礼もかまわないとエリクソンは認めたのだが、「私」はそこに躊躇があり、しかし「本名」での受洗には「家族に迷惑をおよぼす懸念」があったので、「家族との系累を絶つために、分家してどこかに転籍」すべくとりはからい、それがかなったところで、「園当局にそれまでの偽りを詫びて青木安次郎という本名を明かした」うえで、エリクソンの洗礼をうけた。「苦心の末」「本名にかえり」「信仰告白をし」「バプテスマを授けていただき」「はじめて真のキリストの肢、天国のよつぎとなり」「もっとも不幸なものがもっともさいわいな者とな」ったという、ここにまた「私」は〈変現〉を遂げたのだった。「私」の生をめぐって、「肉体の誕生日」1893年4月8日と、「私が神の子として新生した誕生日」1918年6月3日とが分割、分節されたのである。

伝道が実って信徒数が増えると霊交会を結成し<sup>16)</sup>、あらたな信徒たちに対して研究会、学校、集会をとおして「指導に当たった」とする記述がみえる。このときの主語は「私たち」である。ここに登場した「指導」の語は、その主語には霊交会からすれば当然のこと、三宅や長田をあてたのではなく、「私たち」となったのである。

霊交会結成後のようすを記すなかで、この「私たち」の語が多用される——「貧乏な私たち」「私たちの機関紙発行の熱と努力」というぐあいながら、この「私たち」は霊交会信徒集団にとどまらず、新薬の実験とその中止をめぐっては、「すっかり失望してしまった」「私たち」という結合や集合が想定され、それとの対照で、「最初から問題にしていなかった病友たち」もまた像形されている。

---

<sup>16)</sup> ただの誤植だろうが本文では名称が「霊友会」となっている。

あ 1 お 5 き 「私」は父の訃報に接し、「実に十年」ぶりに帰省する。「自暴自棄に陥ってしまった」兄のことを祈るも彼にはそれがつうじず、「そこで私は特殊民への伝道を思い立った」。「理由もなく、ただ昔からの馬鹿げた因襲によって虐げられる罪なき人々のことを考えると、私はもうじっとしていることができなくなった」のである。

さきの「弱い者」同様にここでも「虐げられる罪なき人々」がみつけれ、その「彼ら」への福音伝道を「私」は自己の使命においたのだった。

肉刺と宣告を経て〈変現〉した「私」は、聖書と受洗による〈装填〉を得てまた〈変現〉した。力を得た「私」はそれを他へおよぼすべく、その対象として「弱い者」や「虐げられる罪なき人々」が選出されたのだといえる。伝道にさいして、「私の病気はまだそれほど目立たず、加うるに村人は私を青木の二男だと気づいていないから」、忌避や排除、また「家に迷惑のかかる恐れ」もないという判断が示されている。〈装填〉し〈変現〉した「私」は、癩者一般からも郷里の家族からもわが身を引き離しつつ伝道をおこなったのである。

だが、「目立たない病ではあれ、伝道で歩きつづけるうちに足を傷つけ、伝道を「中止」した。そこで郷里の「幼友だち」を訪ね、彼を信仰に導くなかで、「親友」のふたりは「私たち」と記されたのだった。

あ 1 お 6 き 「子供とせられ」(27)と題された第4の章の場面は熊本となる。「私」はハンナ・リデルの回春病院に移った。初めて「私」がリデルに会ったときのふた言めとなる「あなたは今日から私の子供です」の含意が章題に用いられている。これが回春病院に入って2、3日めのことという。さきのリデルの言葉のあと3つの文を挟んで、「病友達が彼女のことを「お母さん」と呼ぶのを聞き流していた私は」と、ここに回春病院の場面で初めて「病友達」(複数形)の語が登場した。まるで、リデルのまえで入院者すべてが等し並に「病友」となったかの記述である。さきの「聞き流していた私は」につづけて、「彼等が実感をもってそう呼んでいることをしみじみ悟った」というのだから、「私」も「子供とせられて」ようやく「病友達」のひとりとなったように見える。2年ものあいだ寝たきりとなった「病友」が、「骨と皮ばかりの痛ましい姿である」にもかかわらず「感謝」の語を口にするようすをとらえて、「まさに奇蹟である。〔中略〕われわれは奇蹟を必ずしも二千

年の昔に遡って求める必要はない」とも記したのだから、回春病院の「みんな」とともに「私」も「われわれ」という構成（もとよりそれが常態ではないが）をなし得たこととなる。

このあとにすぐ「回春病院は癩者の天国であった」との形容が記され、それは「キリストの愛が、院主ミス・ハンナ・リデルの心から豊かに溢れて院内にみなぎっていたからである」と説かれたのだから、やはり、リデルからのいわば光被によって「われわれ」が照らされ、その光の届く場が「癩者の天国」だということとなる。

**あ 1 お 7 き** その「癩者の天国」回春病院でも、「樂園」大島療養所と同様に、「私」が「弱い」ものをみつける——「私はこんな聖らかなところに住めることになんともいえぬ誇りと満足覚え、入院してよかった、とつくづく感じたものである。そして、ひたすら弱い病友のために尽くし、暇があれば聖書に耽り〔中略〕祈った」。

このあとに「入院後四ヶ月ばかりたった〔1923年〕十二月」におこった「異例」な出来事が記される。「私」が「教会委員」に選出されたのだった。「回春病院の降臨教会は聖公会に属していたし、私は長老派の宣教師エリクスン先生に洗礼を授けてもらった純プロテスタントであった」し、「信徒按手を受けずに教会の委員になった者はそれまで一人もなかったから」の「異例」なのだった。その信徒按手も翌1924年4月20日にうけた<sup>17)</sup>。

回春病院では、「私の心はいつも春風がそよいでいた」し、「私の生活はまことに平和で幸福であった」。言葉をかえると、「院主ミス・ハンナ・リデルの愛に包まれ、降臨教会の役員として働き、弱い人々に奉仕する毎日は私の心を誇らかにしてくれた」となる。

くりかえされるこの「弱い」とは、なにが、どうなっている、あるいは、どうならないようすを指しているのだろうか。それは説かれてはいない。

回春病院を「温室」に、そこに生きる自己を「温室の花」に喩えてしまう「私」は、自己点検をはかる——「余りに恵まれた生活のために、私は過去のわが身につまされて多くの病友が病苦と社会の迫害に呻吟しているのに胸がせまり、自分が幸福であればあの人たちはどうでもよいだろうか、といても立ってもいられぬ気持に追いこまれることもあるほ

---

<sup>17)</sup> 信徒按手はキリスト教における儀式のさいの行為をいう。



どであった」。そうしたときはともかく、「夜もすがら彼等のために祈った」という。祈り、奉仕(さきにみた三宅についての記述を想起すれば「挺身」となる。volunteer であり serve) という自己鍛錬をとおして、俗に言えば温室でぬくぬく育つと喩えられる安楽を相殺するかのようである。いや、相殺というよりも超克となるだろうか——「信仰一念に燃え俗念など這いこむ隙さえなかった筈」というのだから。

あ 1 お 8 き けれども、そうした「筈の私の心の中に、いつの間にか、ある婦人に対する特別な愛情が芽吹いていた」との自覚を告白する。その女性は「歩行も意のままにならず、自分の髪さえ結えないほど手足が不自由であった」。彼女についての紹介が「しかし」という逆接の接続詞をともなつてつづく——「相当の家庭に育ち、病気のために卒業こそしなかったが、女学校の空気も吸っていた」、しかも、「非常に若々しく」て実年齢よりも十歳くらい若くみえる女性だということだった。

のちの記述をさきどりすると、四国伝道での失敗例に、「私よりも教育と教養の高い彼のためにいうことすべて反駁され、いい伏せられて、遂に彼を信仰に導くことができなかった」(44) と記されるくだりがある。「私」には「教育と教養」をめぐる劣等意識があったのだろうか。「不自由」さのある弱者だから「私」の庇護をこうむる相手となり得るが、他方で、彼女は知の上位にあるがゆえに素直に気持ちを伝えられなかったという錯綜した心情があったのだろうか。

その女性をめぐる、その女性への「特別な愛情」をめぐる「私」の思索が展開する——「私はいつも弱い人々のために尽そうと心がけ、また実際にそうして来たのだが、この弱い人中心の考えがいつとはなしに弱い彼女に対する愛情に変わって行ったにちがいない」。ここに「私」のいう「弱い」がいくらか明瞭になってゆく。なにかしらができない状態があり、それに対して「私」がなにかをつくし得ると想定できるとき、そこに「弱い」ものがあるということだ。歩けず髪も結えないほどの「不自由」さは、「私」にとってはなによりの「弱い」ようすとなる。ただし、「私」は男、その「不自由」者は女だから、実際に「私」が彼女の手をとって歩行の介添えをしたとか髪を結ったとかはできなかったことだろう。しかも、「私」がとくとくと説くとおり、院主リデルは徹底して「男女の問題につ

いて細心の注意を払う主義主張の実践者だったから (37)、なおのこと男女がともにいることすらむつかしい回春病院だった。「特別な愛情」が捻じれてゆく。「弱い」ようすがあり、それはまた彼女の出自、学歴、そして美とってよいようすによっていっそう強められ、「私」の「特別な愛情」の対象となった。その対象はなにより女だった。恋愛がままならぬ規制のなかで、「私」の「熱情はかえって掻き立てられていくのであった」となる (35)。

本書はまた、「私」のこの悶々とした恋愛譚が展開する場だったのである。しかしそれは初めから、院主の眼、自己の信仰によって成就の見込みがない、悲恋として設定されているのである。

**あ 1 お 9 き** この恋愛譚は、本書執筆時の「私」によっても記述が濃密に盛られてゆく——「齢すでに六十路を越した現在では、産児の問題はワゼクトミーで解決できるから男女が相愛することを寧ろ自然で美しいと思っている」「最近の若い人たちは実に勇敢で、自分の気持をかなり平気で相手に打ち明けるが、私の若かつた頃は、一般にそういう問題については今の人達より臆病だった」というぐあいである。この恋愛をめぐる「臆病」という自覚は本書にくりかえし記されてゆく。

本書を療養所開設譚と読むとすると、それは難儀があるなかでの企図と攻略の筋立てとして展開しているのであって、恋愛もできる療養所をつくったと唱えているわけではないから、恋愛話にはほとんど意味がなくなるはずとおもう。また、本書を青木恵哉という療養者の「自伝」と読むのであれば<sup>18)</sup>、ひとりの療養者の内面を赤裸々に綴ったとおもしろがられるかもしれないが、しかしそうした読者はこのくだりに興味がないのか、まずほとんど論じてはいないのだ。すると、本書においてこの恋話は閑話休題、箸休め、刺身の妻ていどにおかれてしまうこととなる。そのていどの挿話とかたづけてよいものなのか<sup>19)</sup>。

<sup>18)</sup> たとえば中村文哉の一連の稿。これらについては別に論じる予定。

<sup>19)</sup> この恋愛譚にもっとも鋭く介入した読者のひとりが本書 1972 年版の編者だったといえる。本書で「私」は「彼女の名は都合により仮」の名としていたのだが、さきの編者は「資料としての価値」を根拠に本書の仮名を「みな」「実名」に書き換えるなかで彼女の名も明かしてしまった。彼女の名についていえばそれを曝露することによって本書の「資料としての価値が」どれほど高まったか担保されたのかわたしにはわからなかった。この所為はむしろゴシップ誌なみのスクープ扱いで、かえって「私」への鋭利な暴力になったと感じる。

あ2お0き      しばらく「私」の「愛情」告白につきあってみよう。どう切り出そうか考えつつわたしにとってもかなり気恥ずかしいのだが、恋のつきあいとは、おそらく、あるていど、男女（男男、女女でもよい）双方の合意によって展開するのだろう。そこに思い込みやすれ違いがあるから、ことはややこしくなる。「私」は銜いなく記す——「無論一言も彼女に打ちあげた訳ではないから、彼女の方ではどう思っていたか、それは今だにわからない。しかし、彼女は決して私がきらいでなく、少くともよき友人と考えてくれていた、ということだけは事実である」との確信を記す。「今だに」というのだから、これは本書原稿執筆時においても依然わからないのか、本書のなかの時間経過におけるどこかの時点でのことなのか、そうした時制が曖昧になるほどにちょっとした混乱があるようにみえてしまう。「思慕の情をひたかくしに隠して、それについては私は一語も彼女に洩らさなかった。いや、洩らす勇気がなかった」という率直さは共感を呼ぶばあいもあろうし、恋人か友だちかという迷いも理解されるだろう。「彼女に想いをかける人が現われた」となると、「こんな問題で人と争うことは、私の気持が許さない。私は彼女の意志をたしかめることもなく諦めるよりほかなかった」とまでなると、彼女が想いをよせるひとがあらわれた、のではなく、あくまで「彼女に」であるのに諦めようとするという「私」にはつきあいきれないという倦んだ気分も、読者によってはでてくるとおもう。しかも「私」は、「だがそう簡単に諦められるものではない。彼女の姿を見るのがつらく、遂に私は病者の楽園である回春病院からでようときえ思うようになった」、とまでいわれては、ますます「私」のうじうじした心情と態度に嫌気がさすというものだ。

そうしたときに、「私」が回春病院へゆく重要な動機となった、大島療養所時代の教え子が早逝してしまう。喪失と悲恋は「私」にとって「二重の衝撃」（第5の章題。33）となり、「回春病院は最早温室でないばかりか、それはいくら慕ってもどうにもならぬ人と隣り合わせでいる苦痛の場所だった」というほどとなる。

あ2お1き      「私」自身が明かしているとおおり、「私」は彼女の気持ちをただのいちども確かめていない。ひとり勝手に悶絶せんばかりにみずからを追いこんでいるといえる。もとよりそうした恋愛がなくはない。ごく単純にいて、こうした事案を悩み事相談室に

持ち込めば、あなたは彼女の気持ちを知るのが怖いねえ、といわれるだけのことであり、「私」自身そうした怖れを「勇気」のなさと自覚しているといっているのである。

信仰をめぐっては、じつに一直線にと形容したくなるほどに、「私」は迷いなく自己の〈変現〉を遂げているように記されている、と読める。のちの記述をさきどりすると、四国伝道にさいして「私」は、「初めて神の愛を聞く彼ら〔患者〕に、しかも治癒の希望をもっている彼らに、まさかこの病気が癒らないとはいえず、それかといって信仰によって必ず癒るともいえず、話の進め方に非常に苦心した」(44)と率直に記すのだから。そうした信仰の無力さを自覚しつつ信仰を手離さない確信に照らすと、恋する「私」は優柔不断、得手勝手、遲疑逡巡、懊悩煩悶にすぎ、うんざりしてしまうほどの醜態を晒しているともいえるのである。

もはや「苦痛の場所」となった回春病院で「私」は、自己の信仰の再確認を試みる。「自分自身の問題に苦しむのあまり、主のために苦しむ心がけが薄らいだ気がして深く恥じた」のである。

主のために苦しまなければならぬ。<sup>〔マ〕</sup> 己れを救う道はそれしかない。〔中略〕本当に救われるためには実際に己れを捧げて信仰に生きなければならぬ。それには伝道が第一だ。

伝道意欲の燃えない所に真の救いはない。伝道旅行に出かけよう。

——「そう決心し」たというのだった。そしてさきに早逝した元教え子が担っていた介護の役を担わせるために大島療養所から呼んでいた知己とともに、ついに「私」は回春病院をでた。リデルが避暑中で不在のなか、「私達は先生や病友の祈りに励まされて勇躍出発した」と記されれば、「私」と同道する知己とが「私達」となり、それと回春病院の「病友」たちとが区分されたのである。

**あ 2 お 2 き** 伝道への決意を記したあとのところで本書には、聖書の聖句を引用して「私は「癩者への使徒にして下さい」と祈った」、とある。そして、「私自身その苦しみと悲しみを知る癩者であるゆえに、必ず癩者へ福音を伝えることができると固く信じ」と、「私」が「信仰に燃え立った」ようすが描かれている。「癩者」である自覚をみせるめずらしい記述である。ここで、同病相憐む、という慣用句を持ち出しても許されるだろうか。ここに

は一見したところ、同病相憐、同憂相救という古来より伝来されてきた言葉につうずる一般性がある事態が記録されているようである。

だがそううけとめてしまっでは読み誤るだろう。同じ「癩者」であっても、「福音を伝えることができる」「私」と、それを伝えられる、うけるもの、ここでは癩を病んだものが分割されているのである。教えであれ救いであれ、それは、だれかが、だれかに、一方通行で与えたりさずけたりするものなのだろうか。そうだ、というところに宗教や信仰が発生するのだろう。宗教はまた制度であり、そこには教えるもの、救うものと、教えられるもの、救われるものとが明確に分けられている<sup>20)</sup>。そこでは憐憫も救済も、かならずしも相身互いとはゆかないのだ。「私」は「福音を伝えることができる」能力を得たところで、わが身を「癩者」から引き離しつつあるように見える。同時にまた一方で「私」は、俗世の功利に身をすり寄せるように、伝道の見返りをもとめている。それが「已れを救う道」「本当に救われるため」なのだ。かんたんにいえば、自己救済のための伝道である。

「私」にとって恋愛は、それをうまく制御することのできないところの混沌<sup>カオス</sup>だった。そこには安らぎがあり、他方で惑いがあり、希望と忌避とが渦巻いていた。ひとまずわたしはそうしたところのありようを「混沌」と形容したが、それはひとの生活のなかではとてもあたりまえの体験の一斑だともいえる。だが「私」はそこからの脱却、自己の救済のために恋愛の可能性と怖れのある場所にとどまることを拒絶し、伝道への出発を選んだ。「私」は熊本では、恋愛への力を自己に正<sup>プラス</sup>の〈装填〉をすることはできなかった。「特別な愛情」は「私」の負荷となった。他方で「癩者へ福音を伝えることができる」力がわれにがあると自覚するがゆえに、伝道を選択し得たのだった。

**あ 2 お 3 き** 「四国伝道」(44)と題された第6の章で「私」は回春病院を離れた。するとたちまちにその粗<sup>あら</sup>が示される——「一口にいえばミス・ハンナ・リデルの目の届かぬところでは人々の心がけが随分だらけていたのである」。「全員」にいえば陰日向があっ

---

20) ハンセン病とキリスト教をめぐる論点は、荒井英子『ハンセン病とキリスト教』(岩波書店、1996年)と、それへの批評である阿部安成「病むからだ、信ずるところ—ハンセン病の療養所におけるキリスト教信仰をめぐるいくつかの論点」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.206、2014年1月)を参照。

たわけで、他方で「彼女〔リデル〕は本心から患者を信頼していた」という。こうしたようすにかかわる自己を、本書執筆時の「私」がふりかえる——「年若く理想肌だった私はこんな表裏ある行動が癩で癩で仕方なかった。それは恥ずかしいことであり、信仰の浅い証拠であると私は常に苦々しく思っていた」というわけだ。だからこそ、「私は、一人残らず信仰に徹し、福音のよろこびを悟り、名実ともに宗教病院に愧じない病院をつくりたいと思った」とも記すとき、ここには信仰をめぐる深淺の区別があるとみせているわけだし、それを両端とする信仰の幅を設けてみれば、「私」はまちがいなく深よりに位置するとの自覚があろうにちががなく、そうした「私」が自分よりも浅の方にいるものたちを導き得るのだと明かしていることとなる。

では、はたして国頭愛楽園はどういった病院となったのか。本書の記述はそこにまでいならず、「私」が設立された国頭愛楽園をどうみていたのかは、本書からはわからない。

ところで、現在ある国立療養所には「愛」や「楽」の語がついた名称がいくつもある。沖縄愛楽園、星塚敬愛園、長島愛生園、栗生楽泉園、といったぐあいだ。「光」の語はというと、邑久光明園、奄美和光園がくわわる。療養所に、愛、楽、光がどのようにあったか。

それはともかく、「四国伝道」の章の記述にもどると、その冒頭 6 ページには「私たち」の語が頻出する。全部で 13 か所、そのうち 12 か所が「私」と知己、ともに伝道する強固に結びついた同志というところなのだろう。残りの 1 か所は、その「私たち」が金欠になったために実家にいった場面で、実の兄が語ったところとなる——「お前一人でさえ私たちはもてあますのに、さらに病人をつれてくるとは何事か」のくだりである。

ここには信仰（「病友」とは記されていないことに注意！）により結合した「私たち」と、「主イエスの愛を知らぬ兄」などの「私たち」がけして交わることなく対峙しあう様相があらわれている。実家をでて、知己をその「自宅」に帰し、ひとり伝道に努めるも、この章の以後の記述に「私たち」の語はもうみえなくなった。

**あ 2 お 4 き** 「四国伝道」と題された章には、その地での活動からの転換の兆しも記されている。リデルからの手紙に「沖縄の悲惨な病友を救うよう指示があったのである。そこ以降のこの章の記述には、「病友」とりわけ「沖縄の病友」の語が頻出する。いくらか

の逡巡ののちに沖縄行を決意し、沖縄在住の「病友」に手紙をだし、その返信に「病友たちは苦悶のどん底で救いの手をひたすら待ちのぞんではいる」の文言に、その決意をさらに強くしたというのだった。

さきにふれた逡巡とは、沖縄が異質な土地であることに起因していた。「沖縄と聞いただけで、あの恐ろしい毒蛇を連想した。言語風俗も異るところである。且つ癩を嫌い、無智と迷信が癩につき纏うこと内地以上である」という特殊性のために沖縄行を躊躇したというのである。「私」にはあらかじめ異質な沖縄像が強固にあったというのだった。

「さらに私の気を臆せしめたのは岸名兄の不成功であった」と、以前に伝道を試みたものの失敗がまた躊躇いの要因となったという。しかもさきにふれた沖縄からの返信には、「健康な人ならともかく、同じ病者では彼らを救うことは難しい」とあったのだ。これまでみてきたところでは、この危惧に「私」は強く反撥するはずだ。「同じ病者」でも「私」は「彼らを救うこと」ができると自認していたから。そうした自恃を記しはしないが、その返信内容につづけてすぐに、「だが、私はもう恐れなかった」と明記してあったのだ。

「私」の決意は、聖書の教えと回春病院での祈りによって強まり、「さらにもう一つ私の気持ちを沖縄伝道に駆り立てたもの」に、くだんの女性への「私の切ない愛情」があったという。四国伝道から回春病院にもどってみれば、そこには彼女がいた。また煩悶が始まる。そのようすが「私は日夜血みどろの戦いを続けていた」と描写された。それほどの「苦しみから逃れるためには一歩でも遠く彼女から離れるほかない。彼女の近くに長くいればいほど躓く危険が多い。一日も早く沖縄へ出発しなければならぬ。そう考えて私はミス・ハンナ・リデルをせきたてた」ほどとなった。じつに率直、赤裸々とわたしは感心する。四国伝道のときも、沖縄伝道にさいしても、その原動力に愛があったというのだから。いや、正確に言えば、愛の蹉跌が伝道にむかわせたというのである。

**あ 2 お 5 き** 「私」の活動の場が沖縄となる（第7の章「沖縄へ渡りて」51）。さきにふれたとおり、やはり「私」にとっての沖縄は「見るものすべてエキゾチック」な異質の地だった<sup>21)</sup>。この章では同道する牧師と「私」とのふたりが「私たち」となる。これまた

<sup>21)</sup> 本書にあらわれる異質な沖縄という論点は、前掲阿部『島で』を参照。

さきにもふれたとおり先行する回春病院から「沖縄の病友伝道」を試みたものの失敗したようすがふりかえられる。その回顧のなかに「病友」の語が登場する——「村を離れハマチハマに小屋を建てて住んでいた病友たち」「村人に気兼ねして病友たちは次第によそよそしくなり」というぐあいである。他方でここには、「浮浪癩」の語もみえる。この章の記述のかぎりでは、「病友」はともかくも「小屋」に住むもの、「浮浪癩」はそうではなくまさに「浮浪」するもの、との違いがあるようなのだ。癩を発症したものを分割するようすがうかがえよう。

ここにはまた、さきの伝道者に「学童」が「大和癩者やーい」と囃し立てたり投石したりしたことが記されている。土地の人びとも「あの大和癩者（ヤマトクンチャー）を早くなんとかしなければならぬと寄ると触るとその話で持ちきった」という。「自分の部落の患者さえ極端に厄介者扱いする」土地で、ことさらに「大和」の「癩者」として疎んじられているようすが記録されている。なおここで、「ヤマトクンチャー」という音が記されていることに注意しておこう。土地の言葉はこの章では「琉球語」「島言葉」と記されている。それに対する言葉が「標準語」「日本語」である。「私」は土地の言葉を習得してゆく。

那覇から本部半島の渡久地に移り旅館に泊まろうとしたところ、「私たち」のうち「私」だけが宿泊拒否にあう。交渉かなわず、「私」ひとりが、女将の教える「海岸にいる病友」の「大きな亀甲墓の庭に小さい掘立小屋が二つ並んでいる」ところへ行って、そこに泊まることとなった。この章では、面識があろうがなかろうが既知であるかどうかにかかわらず「病友」の語が用いられている。ただし、そのひとは小屋住みのようなのだが。

牧師とふたりでの伝道がつづけられるなかで、「私」が自己のようすを描写するところがある。さきにふれた宿泊拒否の体験から乗船にも気を使うというくだりである——「当時すでに〔沖縄伝道のころ〕私の手は脱肉して少し指も曲り、顔面神経もまた一部犯されて口辺が引きつっていた。それでも、旅行中病気を看破されてそのために困ったことは一度もなかった。ところが本部旅館ではあの始末だったのである。私は沖縄の人々が癩の症状にくわしく、且つこれを嫌うこと熊本で聞いた以上であるのを知り警戒しなければならぬと思った」。癩と知られない「私」ではあったが、沖縄の事情はそうではなかったというこ



となのだ。

さて、伝道がつづくなか、「病友」の語が頻出する——「病友たちと夕の祈りと救いの証言をして夜の更けるのを忘れて語り合った」「病友たちはミス・ハンナ・リデルを慕うこと深く」「備瀬クシバルの海岸に隠れ住む〔小屋住みかどうか不明〕病友たちを訪ねた」「病友たちはくり舟の操縦がとてもうまい」といったぐあいである。くり舟をめぐるのは、「どうにもうまく漕げなかった」「私」が対照され、また、「浪立ち騒ぐ中を漕ぎ出」すようすをみれば、「彼ら〔病友〕は勇敢であった」と感心することとなる。

伝道の場に登場する人びとで、「私たち」は「私」と牧師、そこに「病友」は入っていないようにみえるのである。信仰の場面を描く、「病友一同と朝の礼拝をしようとしている」という記述も、私たち一同で朝の礼拝をしようとしている、というぐあいには主語は用いられなかったのだ。

**あ2お6き** 「私」は沖縄でわが身を「どん底に身を置く」（第8の章題。64）と決意する。伝道をひとりで担うとなったところで、「私は第一に服装を改めた」。

渡久地の旅館を追われて以来、不潔でみすぼらしい病友達と犬小屋同前の小屋で寝起きを共にし、〔中略〕すでに私は彼等の貧しい貧しい生活の中に身を置いていた。しかし羽織に袴という身装だけは、あまりにもこんな生活にそぐわない。〔中略〕私は彼等の表面に接触しているに過ぎない。福音を伝えて彼等を救うには、どうしても彼等の生活の中に完全に溶け込まねばならぬ。そこで私は彼等の友人としてふさわしいように粗末な霜降の古洋服に着替えたのである。この考えは沖縄伝道を決意したときからすでに抱いていたもので、私のトランクにはこの古洋服の他に継ぎの当った木綿の古着も三枚入っていた。

——「彼等」は「病友」であり、「不潔でみすぼらしく」「貧しい貧しい生活」をおくるものたちだった。対して、羽織袴で伝道をする「私」はいまだ「彼等の生活の中に完全に溶け込」んではいなかったとわかったのだった。そのためにまず服を着かえることが重要な手立てと判断したというのだ。

ここには「病友」といいながらも、しかし「私は彼等の友人としてふさわし」くなかつ

たとの自己点検があらわれている。そして「彼等の友人としてふさわしいように」服を着かえて「彼等の生活の中に完全に溶け込」もうとしておこなったことが、生活改善だったのである<sup>22)</sup>。「みんなで七人、夫婦者三組に男一人」の「病友」に対して、それまでは年に1、2回の散髪だったところに、「私は男達の蓬髪を刈り、顔を剃ってやった」。これにより、当人たちは「見違えるようにきれいになって大よろこび」し、くわえて妻たちも「また幸福そう」になり、そして「彼等の笑顔に私の心はほのぼのと温まった」のだった。あわせて、「掃除にとりかかり〔中略〕小屋の内外もまたたちまち清潔になった」。

こうして——「流れのままに身をまかせていた彼等は今や流れに抗して泳ぎはじめる元気を与えられたように見えた」と記されている。これまでみてきたとおり、「私」はときにみずから力を〈装填〉してきたのだが、ここに「彼等」に対して「元気を与えられたように見えた」と自己の感化の成果を確かめつつあったのだ。清潔にするという生活改善は、それをおこなうものどこか身勝手なおせっかいなのではなく、当の相手にもその傍らの人びとにもよろこばれうけいれられ、しかも元気にする可能性があるというのである。力を与える「私」と、力を与えられる「彼等」との明瞭な分割がここにある。

**あ2お7き** 一方で、熊本のリデルや「病友達」から、香川の長田穂波や「病友達」からの手紙が届くと、「遙か熊本と香川で沢山の人々が自分のために祈ってくれていると思おうと、私はなんともいえぬ力強さを覚えるのだった。祈りの持つ偉力をこの時ほど強く感じたことは私は後にも先にもない」(68)と記す「私」にとって、「病友達」はまた力の〈装填〉の源でもあったのだ。ただしその「病友達」は回春病院と大島療養所にいたのだが。

回春病院からの手紙には、愛情を寄せたくだんの女性からのものもあった。彼女と訣別するための伝道、しかも話しあいを経た両者合意のすえではなく自分で勝手に決めた出立だったはずなのに、未練たらたらの「私」である。

第三者が読めば確かに単なる激励の名文に過ぎない。しかし私にはそのさりげない文面一ぱいにもっと深く切実な彼女の思いが反映している気がした。彼女もまたひそかに私を愛していたのではないかと思われた。もっともそう断定できるところは一つもある訳

<sup>22)</sup> 本書にあらわれる生活改善という論点は、前掲阿部『島で』を参照。

ではない。しかし詩のように美しい文章は綿密な注意をもって書かれている。教養もありつつしみ深い彼女にとって〔後略〕

——もうよいだろう。引用するのも恥ずかしいほどで、「私」が記したとおり、「こんな解釈は得手勝手」であり（しかし本文はまだ「得手勝手な気もしたが当たっているようにも思われた」とどこまでも得手勝手がつづく）、これまた「私」自身が記しているとおおり、「私の心は千々に乱れた」のである。「私」は伝道のさなかにあっても、彼女のことを忘れなかったと書きとどめたのだった。この恋愛譚のくんだり、「私」の「特別な愛情」は本書になくしてはならない構成要素ということとなる。

**あ 2 お 8 き** この章には「私」の「伝道区域」があげられている。「隔離されている」ものが村や字ごとにあげられ、「夫婦者」か「独身者」かが示されたところをみると、後者が断然に多い。「これら五十人の隔離患者と十数人の浮浪患者を対象に私は伝道してまわったのである。／その他自宅にかくれている患者も相当数いたが、ほんの二・三を除いて他はみんな私を敬遠した」とのこと。ここに「隔離患者」と「浮浪患者」とが明瞭に分けられている。前者は村や字から「隔離されている」もので、後者は「洞穴などに四・五日あるいは一週間と寝泊りしながら近隣を乞い歩いていた」ものたちである。すると前者は隔離されたうえでもかくも小屋住みのものなのだろう。また、前者が「家族や部落民の強要によって海岸の小屋で佻しく余生を送る」のに対して、後者は「自分の血を分けた者を乞食になれと家から追い出すとはなんとという惨酷な仕打ち」の果ての「浮浪」だということなのだ。「隔離患者は、たとえ実家からの援助が十分でなくても物乞いせずに暮せることを感謝し、止むを得ぬ事情がない限り町や村に出かけることは滅多になかった」のに対し、「浮浪徘徊の恥辱と苦難は死にまさるものがあるのだ」とは、「私」の感慨である。もとより、「隔離患者」のなかにも「実家が貧しいため」に「やはり乞食にならざるを得ない者も少くなかった」という。

「私」は、「洞穴にいたのは皆こういう気の毒な病友たちだったのである。私はつとめて彼等を訪ね神の愛を説いて慰め力づけた」と伝道の使命を語る。「浮浪患者」もまた「病友」ではあるが、「気の毒な」それにほかならず、そうした「病友」に力を充填することが伝道

の目的となったのである。大島療養所の記述を想起すると、そこでは、気の毒、身の毛がよだつ、真の明るさではない、と描かれていた。だが、「気の毒」との感情が記されることはなかった。「病友」のなかでも沖縄のそれ、さらに「浮浪患者」は「私」にとって最大級の憐憫の対象となったといえよう。

**あ2お9き** そうした伝道の日々のあるとき、信仰について話しあう場面が登場する。そこには、「通訳」をおかなくては会話がなりたたないほどの「方言」を使うものがいたのだが、場の3名は「私達」と記された。「私」と「通訳」と、もうひとり「元気な体をしているくせに物乞いになり下り、癩者の妻と連れだって」「徘徊」したり「洞穴」にいたりするものようだ。

その「物乞い」は世のなかに神も仏もないという。「もし神や仏があるならば、彼女〔「癩者」で「病弱者」の妻〕がこんな病気で苦しんでいるのを知らぬふりなざる筈がない」と根拠を明示したうえでの無神仏論だった。それに「私」は、「私も病気になった当初はそう〔神も仏もない〕思いましたがね、それは間違っています。神様を信仰してから私はとても幸福になりました」と応じた。「あなたはそんな病気にかかっている幸福ですか」「そうですよ」との応答などで会話は終わる。ここでは、なぜ幸福なのかを説くにはいたらなかった。信仰によっても病は治らないとすでに述べていた「私」なのだから、それを論点にはしない。またここでの「私」には相手を折伏しようとするほどの勢いもない。「物乞い」もまたどこか飄々としているように見える。それは「病弱者」の妻がいようが、傍からは「物乞いになり下り」ったと見下されようが、食べるための手立てを確保していたから（このあとで「彼等が食物にはさして不自由しなかったこと」が記される）<sup>23)</sup>なのかもしれない。ともあれ、その彼をかぞえいれたうえで、ここでは「私達三人」と記されたのだった。

とある「浮浪患者」家族ふた組をみつめる「私」は、ときにみせる「子供達の顔はいきいきと輝くようす、岩蔭で無心にままごと遊びをする様子などはさも楽しそうである」ことを知っている。「だがその楽しげな姿はいつも私の涙を誘うのだった。これが彼等に与えられるもっとも幸福な時間だったからである」と憐憫を寄せるのだった。

<sup>23)</sup> こうした民俗についても、前掲阿部『島で』を参照。

ここには切りとったそれをもって全体を決めつけてしまう乱暴な観察がある。もとより「私」は四六時中「彼等」といっしょではなく、事実本書には「時たま」という語が記されている。その家族たちのすべてを知り得ないのに、ここでは「もっとも」といった最上級の形容をつけた「幸福な時間」を定めてしまうのである。わたしに実証する能力がないが、それでも、この家族には「私」があげた以外にも、よりいっそう「幸福な時間」があったと断言する。あたりまえのことだ。憐憫から発する「私」の伝道は、救済すべき対象を弱者に仕立てあげてしまう嫌いがある。「私」には「物乞い」が「食物にはさして不自由しなかったこと」も「腑に落ちない」謎だったのだ（その仕組みを知るところとはなるが）。

**あ 3 お 0 き** 「大体において私は規則的に病友訪問を行っ」ているなかで、その「病友」には、「隔離小屋」に暮らす「隔離患者」、部落のなかにいる「自宅患者」、「近隣の洞穴」に寝泊まりする「浮遊病友」がいると記録する。「病友訪問」には、「病友」たちが操るくり舟を利用する。「彼等」は山で伐採した篠竹を売りにゆくためにくり舟をだす。購買者は病者ではない。「私」はこうした事態を知って、「世間がひどく病者を嫌いながら、利益の前には彼等との取り引きを辞さぬところをみると、癩は怖れられる以上に軽蔑されていたようだ」と記した（75）。世間が癩者を排除する訳に情理がなくとも、癩者とのわずかな交流であれそこには世間にとっての功利があるということか（のちの第12の章では「病友伝道」においても些細な実利、実益が功をあげる場面が描かれる）。

さきに「私」の観察を乱暴と評したが、「病友訪問」をくりかえすなかで、「すべて海岸にある」「隔離小屋は〔中略〕それはそれは涼しくて凌ぎよかった」こと、「病友たちの環境は自然の風趣に富む実にすばらしいところである」こと、「病友達は一分や二分潜るのは平気である」ことを知ってゆく。

だがそうした快、美、能力がみうけられる場所に「私」は、生活改善をくわえてゆく。こんどは、「相互扶助」の観点から「共同炊事にし、便所も一つを共同で使用するようになった」のである。これまた功を奏したとみなされ、「お互いの親睦と信頼が深まり、孤独感から救われて彼等の気持は大変明るくなった。これはまた一人々々が神の子であり、従って兄弟であるという実感を深めるにも大いに役立った」といいこと尽くめのようだ。

他方で、「信仰に目醒めさせる」ことのできなかつた「病友」もとりあげられる。彼の「私は神を信じません」という拒絶をどうにも和らげられないのだが、しかし、神信心をめぐってあれやこれやといいあい、「私達はこんなことが平気でいえる間柄だった」と記せるほどの情交も自覚されている。

もっともそれは「私」の思い込みかもしれず、また、回心が「遂に駄目だった」となつたところでは、「彼は根は正直善良でありながら周囲の木々に伸びるのを邪魔されてその幹は曲りくねっていたのだ」と不信心ものの歪みがみつけられ、さらには、「それを矯め直すことができなかったのは結局私の愛が足らなかったためである」とわが身の不備がかえりみられる。伝道による回心であれ、訪問をくりかえすなかでの生活改善であれ、どちらにおいても自己の使命は矯革（矯め直す）なのだと表明しているのである。

**あ 3 お 1 き** 「初めての夏」(74)と題されたこの第 9 の章では、おそらく隔離小屋住みの、名も記されない「二人の病友」といっしょに台風の暴風対策を準備しているところで、「私達」が主語におかれている。台風に備えるための作業をめぐる「協同」が強調されたからなのか、ほかの箇所とくらべるとずいぶんと安易に「私達」が構成されているようにみえる。

それはともかくも、その記述の前後には、2 つの戒めが記されている。1 つは、「伝道においても、福音を説くだけでなしに聖書の教義を実践して、接する人をして自然にその心を動かすめるということが最も大事だ」ということ。もとよりなかなか困難なことではある。散髪、掃除、共同の炊事や手洗所のいずれも、そうすることにより当事者もまた心地よくなったり簡便になったりという利があるかもしれないが、いくらかは強制力を働かせての生活改善だったろうから、そうした局面においても、「接する人をして自然にその心を動かすめるということが最も大事だ」とかえりみたということなのか。

もう 1 つは、本書執筆時の感慨で、「当時はまだ年若く純真で何事でも截然と解釈しなければ気のすまぬ傾向が強く、その奥にさらに深い真理があることには考えおよばぬほど経験も思慮も浅く従って視野も至って狭かつたわけである」とのこれまた自省である。さきにわたしは、本書にあらわれている生活改善を矯革だと述べたが、こうした歪みを矯め直

すという仕儀を若さゆえとかえりみたのだろうか。

**あ3お2き** あれこれと福音を説き回心を勧めても、癩者への生活改善を実施しても、沖縄の癩者をめぐるその根本が革まらず、「私」はそれを気に病む——「癩者特に沖縄の癩者の悲惨さが今更ながらぐいぐい私の胸をしめつけた」(85)。こうした苦衷は重篤な癩者に寄り添うところで発せられた。信仰にしたがえば、ひとの死は召天である。だがやはり、「信仰に徹し喜んで召されるといっても、その最期は余りに淋しい」と、ひととしてごくあたりまえの胸のうちを明かす。このとき「私は再び跪いて祈」るばかりだった(第10の章題は「星下に祈る」83)。

私は沖縄の癩者に福音を伝える使命をおびてやって参りました。しかし神様、この地の癩事情は余りに悲惨深刻でございます。そして私は彼らを救うには余りに弱く、為すところを知りません。けれども拱手傍観するわけにはまいりません。神様、死ぬに死なれず生きるに生きられない彼らの血の叫びに耳を傾けて下さい。そして私に愛と彼らのために死ぬ勇気と彼ら救う力を何卒与えてください。アーメン。

との祈りのなかで、「私」は自己の弱さをあらためて知り、力を与えよ、わが身に力を〈装填〉せよとうったえ、「祈り終えたとき〔中略〕牧師が与えて下さった聖句が稲妻のように私の脳裏にひらめ」き、「それまで内部にあって私の心を牛耳っていた弱い頼りない気持がすーっと消え、そのかわり強く頼もしいものが滾滾と湧き出してきた」との、小さな〈変現〉が記録されている。

「私」は祈りをとおしてわが身に力を〈装填〉できるのであって、対して、「彼ら」は「死ぬに死なれず生きるに生きられない」ものにとどめおかれてしまうのである。救い得る「私」と救われる「彼ら」とのあいだにある断崖は深い。両者の位置が代わることもない。

既知の癩者の「重体」が知らされて始まるこの章では、紙幅の過半となるまで「病友」の語がみえない。重篤の「彼の側に寝泊りしながら傷の手当や食事の世話をしたり、ともに信仰を語り聖歌を歌って過ごす日々がなんとなく楽しかった」との独白がある。「信仰を語り聖歌を歌」うというのだが、ここには教理に即した事態の理解が示されているわけではない。「なんとなく楽しかった」という曖昧でいい加減な、しかしほのぼのと和らい

だ穏やかで和やかなようすが確かに伝えられているのである。

さきにひとくちに「病友」といっても、「私」の装いの方がかえって友だちであることを裏切っていたという自省をみた。この知己の今わの際、末期にのぞんでは、病友であれ友人であれ、もはや「友」などという語を冠さずとも、また、「私たち」などといったつながりの結実をことさらにみせずとも、病臥するものとその傍らで介護する「私」とは「なんとなく楽しかった」といいあらわせる時と場とを共有したようにみえる。このとき「病友」はもっと遠くにいたのだ。

**あ 3 お 3 き** 看護をするここに、訃報が届く——「一病友が死んだから埋葬式に立ち合って司式してくれとの使いが来た」のだ。「病友たちは一生懸命に漕いだ」くり舟でむかうも埋葬式にはまにあわず、翌朝にその墓前で故人の冥福を祈った。この描写では、「私たちは彼の墓前に集まった」「私たちは墓前の草の上に車座になって故人の冥福を祈った」と記されている。これはくり舟を漕ぎ、また遠地から集まった「病友」たちをふくめた「私たち」である。病臥する重篤の知己と「私」とをめぐっては使われなかった語である。故人をまえにして、さらにはその霊が召されたイエス様のまえでは、みながひとつになったとでもいうかのような記述ではないだろうか。

他方で重篤者の臨終にはまにあわなかった。その彼も、遠地で亡くなった「病友」もどちらも「医者に診てもらうこともできずに死んでいった」、これは彼らふたりにかぎった酷さなのではなく「沖縄の病友はみな適当な治療を受けることができない」のだ。さきにあったように、「悲惨」さをまえにして癩者はだれもが「病友」となって等し並になる。その「病友」のために、「療養所が欲しい、療養所を建設しなければならぬ、私はつくづくそう思った」との決意がここに初めて記されたのだった。

死に目にあえなかった故人をともに看護したもうひとりの知己とともに、彼の墓前で祈るとき、いつのまにか故人の「姉さんが影のように私たちの後に立っている」と記された。この「私たち」にはやはり故人は入っていないだろう。

「星下に祈る」と題された第 10 の章の末尾は、「たてつづけに二人の兄弟を失った悲しみはまことに大きかったが、病友たちの信仰の確証を得た喜びもまた大きく、それによっ



て私は大いに勇気づけられた」と記して閉じられた(92)。救う／救われるという位置は代わりようがないが、後者にいる「病友」が、「信仰の確証」をとおして、前者の「私」を「勇気づけ」ることはあるのだ。べつにいえば、「私」は「病友」から力を得て、わが身を〈装填〉するのである。

**あ 3 お 4 き**      ともに沖縄で伝道した牧師が、回春病院を離れて沖縄で伝道をするとの報が入る。それをうけて、「伝道の主な対象は最早病者ではなく一般健康人である。しかし私は先生が私達病者のことをお忘れになるような方ではないことを固く信じ」たと明かす。ここではめずらしく、「私」も「病者」とともに「私達」とまとめられている。「再会」(93)と題された第11の章では、この「先生」をまえにして、特定はされないだれかといっしょになった「私達」が主語となる文が散見される。

「沖縄へ来て初めてのクリスマス」が描かれる第12の章(章題「クリスマスの夜」98)では、わずか2か所にしか記されない「私たち」の語は、それがだれを指すのか曖昧なまま使われている。

クリスマスゆえに熊本のリデルから贈りものが届く。それについての言及はあとまわしにして、あの愛情についての記述をみよう——「沖縄へ来て初めてのクリスマスである。いろいろの思い出が去来してなかなか寝つかれない」まさにこころにはくだんの女性が浮かんだ。もう引用をしないが、あいかわらずの優柔不断ぶりが色濃くあらわれている——「結局いざとなると私にはその〔告白の〕勇気がなかった」といつもの堂々巡りである。だがこのときは、「目出度い降誕節の夜半、彼女のことばかり考えていることが何だか悪いような気がして、私は彼女のイメージを振りすてるために強く頭を振った。脳髄が頭蓋骨につき当って思わず眩暈がした。と思うと軽い嘔吐感に襲われた」——<sup>甘ったるい</sup>メロウな恋話が一転<sup>このさきいか</sup>サスペンスの予告となった。昏睡のなか悪夢にうなされ、それがまた「すばらしい夢」へと一転する。それは回春病院の礼拝堂で、リデル、職員、患者、「沖縄の病友」の顔がみえ、「不思議な光芒に包まれてい」という。そして目が覚めると、「粗末な掘立小屋に横たわっている惨めな自分を発見」して、夢そのものと夢のような迷いと二重の意味で迷夢から脱してゆく。

これはまるで、自分でも制御できない「特別な愛情」に苛まれたそのあとで、いったん、いわば自己の器を<sup>から</sup>空にしてふたたび〈装填〉させるための作法にみえるのである。

その後の展開は、夢から覚めてあらためて聖句を理解し、食欲がわいたところで「病友」に頼んだ重湯を食べると、「私はぐんぐん元気を取り戻した」——〈装填〉がかなったのだった。ここにまた「私」は〈変現〉したのである。

**あ 3 お 5 き**      リデルからのクリスマス・プレゼントにもどろう。それは「病友たち」に贈られたもので、「私がいつも訪問する各地の隔離小屋の病友・自宅患者・浮浪患者など」に宛てられた「一枚々々みな札がついていて病友の名が書きこまれている」という。ここに「病友」は、隔離小屋、自宅、浮浪の三形態なのだと明示され、しかもみなそれぞれの名が把握されていたと記録されているのだった。これが事実だとすると、「私」の訪問や伝道の濃やかさを、それがあらわしていることとなる。

沖縄のクリスマスは、回春病院でのそれとくらべると、「なんと淋しいことよ！」といわざるを得ない——「それは楽しいクリスマスというよりは感謝一方のクリスマスである」から。だから、「もっと彼らに楽しみを味わわさなければならぬ。それにはどうしても療養所が必要だ。彼らを一カ所に集め、その生活と医療を保証する設備が必要だ」と決意をあらたにしたのだった。

ここには「病友」の位置を変えようとするわずかな芽が萌しているといえる。「感謝一方」、与えられるだけの「病友」がみずから「楽しみ」を（この稿の文脈でいえば）みずからに〈装填〉できるようにしたいと唱えたのだから。ただし、厳密に言葉尻をとらえていえば、「味わわさなければならぬ」とは、これまた楽しみを味わえるようにさせるのが「私」などの与えるものたちなのだという意味がまだここに貼りついている。ただこれは「私」に一貫した姿勢であって、すでにみたとおり、「接する人をして自然にその心を動かす」という方針にそったまでではある。

さて、与えるものはその対象を網羅すべく、ただし生活形態にあわせて、与えられるものたちを三様に区分けした。しかもその名まで把握しているとは、「私の伝道は大体順調に行った」と自己評価し得る証左となる。だが、「ただ一度だけ悲しみのため途方にくれたこ

とがある」とも明かす(108)。「洞穴で浮浪病友たちと礼拝をもったり、聖歌の練習をしたりした後近くの自宅患者を訪問した」ときのこと、自宅にいた「病友」が「もう家へは来ないで下さい」と告げ、その理由に「乞食とつきあう奴は家に来てもらいたくないと父が大変立腹して」いることをあげた。これはその父だけの意思ではなく、「あの人たちを見捨てよ、というのですか」との「私」の問いにその「病友」が「そうです」と応じたのだから、その当人からの拒絶でもあったのだろう。

この出来事は、「私」を「悲しく」させただけでなく、「私は再びふり出しに戻らなければならぬ。がやり直しは最早きかぬのではないかと思われるほどそれは容易な業ではなかった」と痛感せしめるほどとなった。

「私」の見立てでは、「彼には自分は乞食ではないという自負心があり、それが非常な邪魔をした。彼にしてみればこのはかない自負心だけが生甲斐を繋ぎとめていたのだ」となる。詳細は示されないながらも、「彼の家族に知られぬように、夜しげく通ってやつのことで彼の自尊心を愛に置きかえることができた」と、「私」は成果を記した。

おそらく、当事者のこの「自負心」や「自尊心」を適切に説くことが、癩そしてハンセン病問題の理解につながると、いまわたしはおもう。これを「はかない」ととらえるだけでよいのか、彼の生きがいはここにいう「自負心だけ」だったのか、わたしたちが当事者をどのようにみるかが問われているのである。

あ 3 お 6 き 「病友とともに」(109)と題された第13の章には、なにが記されるのか。

「一度ぜひ行ってみたいとかねがね思っていた」、とある場所へおもむく。途中で「顔見知りの二人の浮浪病友」に出会う。その名は記されない。「もう一人の病友」「私」「彼等」と表記されるなか道中を進み、ふたりの服装が「みじめ」とあらわされ、それぞれの後遺症も「一人は鼻柱がつぶれ、もう一人は足を前方へ投げるような歩き方をする」ので、「私もまた服装こそ普通であるが、足をすこし投げる上に神経を犯されて唇がゆがんでいる」ので、「私一人ならばさして人目を引かないだろうがこう三人揃っては目立たぬわけにいかない」と、めずらしく「私」が人目を気にしている。

理由は、ちょうど「学童の登校時間」で、自分たち「一行を見て緊張する子供たちの様

子が私の神経をいらだたせた」からだった。以後しばらくのあいだ、「私達」と主語が記される。まるで、自分たちを忌避し、「クンチャーやーい」と囃したてたり、投石したりする子もいる」なかで、そうした子どもたちをまえにして、たまたまゆきあつた 3 名が「私達」となったかのようである。

かの子どもたちに「私は憤りを感じ」、また「癪者を省みず、子供達をしてそうさせる社会への憤懣」がつゆる。他方、ふたりの「病友も腹を立てて何やらぶつぶついていた。しかしそれくらいのことはいつものことで、彼等は慣れっこになっていた筈だ。ただ私と一緒にであるため、そうされることがたまらなく恥ずかしかったのだろう」と、「彼等」を「私」が推しはかった。

ここには道ゆくなかで生じた「私達」という結びあいが、常態や実態ではなく、ほんのかりそめのふれあいなのだと告げているのである。「私」の憶測によって、「慣れっこになっていた筈」の「彼等」を、「私と一緒にであるため、そうされることがたまらなく恥ずかしかったのだろう」「彼等」を、「私」が像形しているのである。このときまた、「私」が「彼等」を「私達」から引き離した、あるいは、「私達」から「私」をみずから引き離したといえよう。「私」と「彼等」との違いは、後者が「浮浪病友」であることだ。

もちろん「私」も「彼等」もたがいに疎んじているわけではない。洞穴での宿泊、食事時には、「洞穴の入口で炊煙が立ちのぼり何となく気分が楽しい」し、「ご飯の炊ける音と香いがますます楽しい気分をそそり、「私達は感謝の祈りをささげ、よろこびのうちに舌鼓を打った」のだから。食後の浜での美しい夕暮れのなか、「私達は子供のように歌いつづけた」と、おそらく至福のときと形容してよいような時間を 3 名はともに過ごしたのだった。

夜が明け、「実においしい」朝食をみなで食べ、ふたりの「本道を行かずに山越えしよう、その方が近くもあるというので案内知らぬ私は彼等に一任した」（「帰りは一人なので本道に行く」こととなる）。山越えの能力に歴然とした差があり、「私は懸命に彼等を追う」あたりの記述のなかでまた、「私」と「彼等」「病友」とが分かれてゆく。以後、「私」と「彼等」が別れた」この章の末尾まで「私達」の語は登場しなかった。

つづく第14の章の始まりも、「浮浪病友たちと別れた私は」となる。

あ3お7き 山越えのさきは——「海岸からほぼ三角形に入りこんだ一段低いところが彼等〔病友〕の隔離地帯である」(116)。ここで、「板だけは立派な杉板だが、柱もお粗末なもので、掘立釘づけの仮小屋でしかない」「隔離小屋」の仕組みを知ることとなる。沖縄の「風習」である洗骨にかかわって、それが終わると「棺箱」を焼却することなく捨ててしまうばあいがある。それが「病友たちの小屋の壁になり、床にな」というわけだ。「私」は、「この皮膚に粟を生ずるような話をきいて私は今さらのごとく小屋を眺めまわしながらそれは沖縄の病友を最もよく象徴していると思った」と書きとめた。ここに記されていないなにを象徴しているのかという点は、まちががなく「惨め」ということである。

「私」には訪沖まえから沖縄を特殊視しているところがあり、訪島後にそれが強まったとみえる。言葉、食べもの、生物、風俗習慣などをめぐって、「私」は沖縄で「病友」たちの生活改善に努めるとともに、その一方で、「琉球語」を覚え、豚の脂をおいしく感じるようになってゆく。だが、いったん悲惨の極みと形容できるような（「皮膚に粟を生ずるような」）奇異な事例に接すると、それを「病友」のすべてに押しひろげて嘆き悲しみ、同時に、そうした境遇に貶めているものたちを排撃するために身構えているようにみえる。

この地の訪問はまたあらたな知見を得る機会となった。ひとつは、沖縄のなかでも村や字によって違いがあり、「移民熱がさかん」な村で「その送金で沖縄一の富裕な村」では、「病友達は村からかなり広い土地を与えられて自活し、何不自由なくとまではいかないまでも、物乞いに出る必要はなくどうやらその日その日を送っていた。山があるので立派な家はできるし、水も薪も豊富である。というわけで、沖縄でもここの病友たちだけは人間らしい暮らしをしていたといえる」と知ったのである。「みんなが協力して自分たちの生活を自分たちの力で維持する。それはまったくすばらしいことだ。第一物乞いをする者もいなくなる。〔中略〕土地があれば万事解決できるのだ。よし、土地を手に入れようと私は考えた」のだった。「療養所が与えられるまでの中間対策として、病友の生活を向上させるために土地を手に入れるということは賢明なことと思われた」。

「みんなが協力して自分たちの生活を自分たちの力で維持する」ことが実現すれば、与

えるもの／与えられるものという位置関係を動かすこととなる。もっともその端緒は、「土地を手に入れること」ができるもの、それはやはり与えるものとなるが、そうした力のあ  
るものが手がけなくてはならないとなるのだが。

**あ3お8き** この村での礼拝で「平安に満たされ」「乞われるままに当分逗留すること  
になった」。そこにひとりの男がやってくる——「自分の家へでも帰って来たような気安い  
態度でやって来た。病友との応対から見ると非常に懇意な間柄である。陽に焼きたいかにも  
頑健そうな体格であるが、眼はおだやかに清く澄み人のよさを示していた。年はおよそ  
五十ばかり、明らかに病者ではない。「病友のごく近親の者」ではなく「まったくの他人」  
ながら、家業や商いの「時間の都合でこの病友の家に泊まることがよくある」とのこと。

こうした「意外」な相手に「私」は、「沖縄ではこの病気は大変嫌われていますが、貴方  
のような方がいられるのは珍しいですね」というと、彼は「この病気はそう簡単にうつる  
ものではありません。だから私はちっとも怖いとは思いません」と応じたので、「絶対に  
うつらないとお考えですか」嫌わないのは有難いが、その心の底に自分らには感染するも  
のか、発病するのはお前たちのような卑しい種族だなどと思っていやせぬか、という気が  
したので私はそうきいてみた。すると、「いや、うつるのはうつる。たとえば病人の冷え  
た食べ残しなどを食べるとうつる。だから私はここでは冷めたお茶などは飲みません。同  
じ人間だから注意を怠ると誰にだってうつりますよ」彼は本病に関するかぎりすべてを知  
りつくしているといわんばかりの自信をもっていうのであった。

こうした会話をうけて「私」は、「無論彼のいうことがそのままそっくり正しいとはいえ  
ない。だがそうたやすく伝染するものでないのは事実だ。かつ彼はことさらに力をこめて  
「同じ人間だから」といった。こんな人に会ったのは実にすばらしい発見である。私は感  
動で涙がこぼれそうになった」と深く強くこころ動かされたようすを記したのだった。

そうかんたんに伝染るものではない、という病者自身の、またそのみぢかにいるもの  
による実感は当時、なかなかひろまりはしなかった。

**あ3お9き** この「人間」であることをめぐる記述を本書にみると、たとえば、大島  
療養所をでて四国伝道しようとするところで、「私は特殊民への伝道を思い立った」とみせ

たときに、その説明を、「世間から「四つ足」と呼ばれ、特殊扱いされていた彼らの劣等感と悩みは癩者以上であった。世間の目から見れば、癩者は兎にも角にも人間であったが、特殊民は動物でしかなかった」としていた (25)。世のなかで、より劣位におかれていたものたちにへ福音を説こうというところで、人間か動物あつかいかという違いが示されたのだった (第 3 の章「帰省して」)。

また、「隔離患者」と「浮浪徘徊」するものとを対照して記すところでは、後者の「恥辱と苦難は死にまさるものがあるのだ」とみせ、その一例に、「浮浪徘徊」するものと道ですれ違うときに、「心ない子供達の中には後から石を投げつけるものもいる」ことをあげ、さらに、「それを見てたしなめる人のいいかたがこれまた実に情けない」と示す——「そんなことをしてはいけない。あれでも人間からなったのだ。気の毒じゃないか」と。これを取りあげた「私」は、「いかにも憐み深そうにいう。全く人間外だと思っているのである」(72)との憤慨を記した (第 8 の章「どん底に身を置く」)。

癩者に投げつけられる、人間ではない、との悪罵や蔑視を反転させて、「癩者も同じ人間ではないか、癩者なるがゆえにこの恩典から除外するとは不公平であり不当である」(165)との抗議の論拠に用いられるばあいもある (第 20 の章「屋部の修養会」)。ここにいう「恩典」とは、「盲人」への公共の「援助」を指している。だがそれも通用せず、「癩者に対する社会一般の態度は実に言語同断<sup>〔マア〕</sup>で、癩はまさしく人間失格を意味していた」とあらためて知らされ、それを記さなくてはならないのだが。だからこそ「私」は、「沖縄では癩者は療養所なしには人間らしく生きられない」と確信するのだった (166)。

癩を発症したものの自身が、自分たちのあいだの違いや異なるようすを自覚する。いや、ことさらに自覚などという語を使ってあらわすよりも、沖縄の当事者にとってみれば、まず住むところが違うのだから (自宅／隔離小屋／洞穴や浮浪)、異なるようすがあるのは自明のことだったろう。それを観察者は、異なる類型がある、沖縄ではそれが三類型だったと記録してみせたのだった。

だが、癩を発症したものを嫌忌するには、そうした類型が複数であることなどどうでもよかったにちがいない。動物か、動物並か、それよりはいくらか上、ということなの

か、それでも人間と喩えるか、ひとであっても「卑しい種族」か、のいずれかの判定をくだすのだから。

「明らかに病者ではない」ものによる伝染病の仕組みをめぐる「発見」とそれへの「私」の「感動」が記されたのち、「早禱晩禱・聖歌練習・畑の手入れという具合に、私達は肉体的にも精神的にも充実感にみちた日々がつづき、病友達は口口に気分が大変明るくなったばかりでなく、体の調子もよくなって病気だということを以前とちがいつたまにしか自覚しない、不思議なことだ、有難いことだ、といていた。ほんとうに恵まれた日々であった」(120) という文章のなかで、だれを指すのか曖昧な用法で「私達」が記されただけで、この第14の章(「自分の噂」116)のべつな箇所に、「病友」という記載があってもこの語はみえない。

**あ4お0き** さきにわたしが「至福のとき」と形容した「私達」のつかのまの時間を過ごした洞穴を「私」はずっと気にしていたようだ——「浮浪病友たちと一夜を過ぎた思ひ出の洞穴、特に夕方と明け方に深い印象を受けたあの太陽と雲の美しさ、および暁の星の清らかさはあれ以来ずーっと私の頭の中の片隅に明滅していた」のだった。

そこにゆくかどうか迷いつつ、ゆくべきさきの行程がどうにも気になり歩を進めようとするも、「ところが部落を過ぎたとたん私は立ち止まり」、その洞穴へと「歩き出さざるを得なくなった」という。理由は示されていない。いってみるとそこには、「一人の見知らぬ病友が悄然とやぶれ吠の上に座っていた。〔中略〕病状は相当進行している」。「彼は私を見てとまどい顔を見られないようにうつむいた」ので、「心配することはない。私もあなたと同じ病気です」／すると彼ははじかれたように私の顔を見上げ、それから確めるように私の手を見た。そしてやっと安堵したふうである。／彼は問われるままにぼつりぼつり身の上話をした。

「私」は彼に「神の愛を教え〔中略〕一緒に暮そうとすすめた」が、「彼は涙を流して感謝するだけで、頑として私のすすめを拒んだので、「その日は、遂に彼を残して立ち去るに忍びず、一緒に洞穴に泊ることにし〔中略〕彼と共に昼食とも夕食ともつかぬ食事」をした。翌朝、「私」は彼をおいて出立した。



この章は、「自分の噂」という章題にそぐわず、複数の挿話の方が目立つ。「隔離地帯」のようす、「隔離小屋」と「棺箱」、「人間らしい暮し」、「同じ人間だから」という言葉、そしてひとり洞穴にいた「病状は相当進行している」「浮浪病友」のこと。「裕福な家の息子だ」という病友」との会話にでた「自分の噂」の方がむしろ挿話で、いろいろな人びととの少しのあいだの団欒が、ここでの主題のようにみえる。

とりわけ、信仰には導けなかったものの一泊だけともに過ごした「浮浪病友」とのつかのまの交わりは、こうしたまさにふれあいが「私」の伝道あるいは訪問のもっとも大切なところとあらわしているように、本書を読んで感じる。

**あ 4 お 1 き** 熊本から牧師が来沖すると、「私」の拠点に「病友」が集まり、「総勢九人」になった。「三つの小屋」では「窮屈すぎる」ので、「小屋に帆で差掛けを下し、地面に棺箱の板を並べその上にごさを敷いてそこに落ちついた」。牧師がやってくると、それ以降の描写に「私たち」の語が登場する。牧師にして病者ではないものと、「私たち」癩者との区分ということか。もっともその牧師もべつの場所で「病者だと勘違い」されるのだが。

やがて「私の訪問する病友は二五〇余に達したが、その内一二〇名以上が洗礼を受けた」と記録されている（第 15 の章「カタコムの聖者」125）。のちの章（第 17 の章「自転車」）には、「当時、私の知らない浮浪病友というのはいない筈であった」（144）という記述がある。「私」の訪問範囲はかなりひろく、また面晤したものの数は相当なものなのだろう。

教えを説き、信仰をひろめようとするだけでなく、薬を安価に分け与え、その効果があるられると、「急に私に頼りはじめた」ものが増えていったという。そして、「私」はもとより私の使命は伝道にある。しかし伝道一点張りの頃は私を避けていた彼等が病気のよき相談相手になってもらえるとなると、進んで近づいて来る事実直面して私は新（マ）なに洋々たる道が開けた思いがした。病気の相談を受けながら彼等を信仰に導く、それは確かにすばらしい方法である。

とおもいたった（136）<sup>24</sup>。そうして「いよいよ病友たちの信頼を得ることができ〔中略〕

---

<sup>24</sup> のちの沖繩 MTL 結成にさいしても「私の要請によって伝道にはタッチせず専ら癩患者の生活救護のみをその目的とすることになった」と記されている（218。第 25 の章「沖繩

私の訪問先は急激に増え、従って私の真の目的である伝道もまた今までより楽々と多くの実を結ぶようになった」のだが、他方で、「薬だけに頼ってはいけない」「安んじて凡てを神様にお委せしていれば救われるという自信を持たせるように努めた」のだった。

沖縄の「気候がよい」こと、「信仰による精神力」、「大楓子油の治療」によって、「青松園や回春病院の病友に比べ概してずっと病状が好転した」ともいう。ここでわたしは「好転」の実態を問わない。もとよりそれを解明する作業はかなり困難となろう。それよりも確認しておくべきは、「伝道」と「相談」を組みあわせて「病友たちの信頼を得」られるようになったというところである。「相談」には、大楓子油の調達にくわえ、「甘草・防風・大黄など十二種を取り合わせたもの」というおそらく漢方薬の調合などもふくまれている。

信仰はなにか（ここでは「病気の相談」と結びつくことにより、信じるそのひとにとっての力となるのだろうし、そうしたなにかもまた信仰という世界やこの世や自分自身をかえりみるきっかけと連動することによって、なにかしらあらたな生きるときの意味を獲得するものなのだろう<sup>25)</sup>。この記述のある第16の章の題は「伝道と治療」（131）だった。

**あ4お2き** あるとき「私」は、「近くの洞窟内で、数人の浮浪癩者が一人の女患者を輪姦していた」という噂に接する。これは「センセーショナルな話を捏造」したのであって、「今度のことにしても、美しい助け合いがいつの間にかとんでもないものに変えて喧伝された」のだった。「癩者はそれまでに幾度無実の罪を着せられたことか」、「これらはみな癩者なるが故に無理に負わされる十字架である。弱い故に、抵抗する術がない故に、癩者はいつも泥沼につき落されるのだ。私はくやしくて仕方なかった」と口惜しさをページに滲ませたのだった。

ここには「癩者」への不当なあつかいに憤慨すると同時に、「癩者」を「弱い」ものとみてしまう「私」の先験性や自明視があらわれている。

しかも「私」が「憤慨」をみせても、「彼らは「またか」といわんばかりの様子でしかなかった」。だがそれは「いじけた諦め」ではなく、「彼らはイエス様を見上げ、イエス様と

---

MTLの誕生)。

<sup>25)</sup>たとえば大島の療養所では信仰と自治と修養、それらと文筆や演劇という連繋がみられる（前掲阿部『島で』参照）。

似た境遇にある自分たちを発見して、世の横暴にじっと堪えている。〔中略〕義の不滅を信じ、最後の勝利を疑わない毅然たる態度から生まれる忍耐」なのであって、それを知った「私」は「何という崇高な姿であろう。私は頭の下がる思いがするのであった」と賞讃を記したのだった。「弱い」ながらも、「毅然」とした「崇高」さがあるというのだ。

これまでみてきたとおり、「私」には癩者を弱いものとみて、救われる彼ら彼女たちと、救う「私」とに分割していたところがあった。ときにそうしたものたちが「私たち」をつくりだすとき、「私たち」になるときがあり、両者のあいだにある深淵が埋まったかのようにみえる至福のときがあらわれもしたものの、それは永続する関係ではなかった。

この「センセーショナルな話」をめぐるのは、救う／救われるという関係とはべつに、「私」が「癩者」を仰ぎみるそのきっかけが生じたのだった。これもまた「私」のひとつの〈変現〉といえそうなのだが、しかし、記述はこののちすぐに、「さて、話は半分横道にそれが、私はこの病人」を彼の小屋まで自転車で送りどけたと記して場面を転換してしまい、自他の関係性を革めるきっかけを熟考することは、当時も、そして本書執筆時にも放棄されてしまったのだった。

**あ 4 お 3 き** 「私は仕事の余暇を利用して三つのことを計画実行した」（第 18 の章「敷地を整備して」148）。「生活を少しでもよくしようと思って」というのだから、これもまた生活改善の一環となる。その 3 つとは、「薪小屋と雨水タンクおよび庭作り」だった。「薪小屋」への「みんなの喜びようは大変なものであった」というし、「雨水タンク」もまた「病友たちに感謝された」という。だが「花壇」もつくろうという「庭作り」というと、時間がかかるうえに、「私」がそのために負傷したこともあって、「病友たち」は「石垣がなければ困るという訳ではなし、怪我をするだけ損ですよ」と忠告したり「何の関心も示さなかった」りした（もっとも「薪小屋」も「雨水タンク」も当初は同じだったという）。それがだんだんと「協力」や「手伝い」を得られるようになり、できあがると、「何ともいえず気持がよく、誰かが急に金持になったようだといったが、この言葉はたしかにみんなの感じを端的にうまく表現していた」とよろこびあうようになったというのだ。

これらの「計画実行」はそこに暮らすものたちにもよろこばれたのだが、他方で、「私に

人知れぬ喜びと満足を与えてくれたばかりでなく、労働の楽しみを教え、物事に対する私の自信を強めてくれた」——べつに言えばこれもまた「私」自身の〈装填〉になったのだった。

ただやはり、「季節季節の花が咲きみだれ」る「花壇」は、「私たちを慰めてくれた」と記されたのだった。花々をまえにしたとき、それによる慰めを感じる「私たち」というつながりが実感されたのだろう。

あ 4 お 4 き この「敷地を整備して」と題された章では、さきの3つの「計画実行」にとどまらず、土地のようすがさまざまに愛でられ讃えられている。そこは「自然に恵まれた所であった」のだが、「ただ癩者とそのみすぼらしい小屋があるばかりに嫌われていたのである」(153)。

それが変わった——「ところが今や以前とちがってこの癩者たちは粗末ではあってもきちんとした服装をし、その住居また惨めだとはいいながら石垣を繞らしてちゃんとし、庭には四季おりおりの草花が咲きかおる」と誇れるほどとなったのである。ここに改善をなし遂げた「私たち」が登場する——「私たちの存在」はこの地を「いまわしいところとするどころか、むしろその景勝にマッチするものとなった。美しい風景画の中の汚点がそれを引き立てる重要な要素となったのだ」という、本稿の文脈にそくしていえば、ここに「私たち」「癩者」が〈変現〉したのである。

この地が「村人たちにとって眉根をよせるところではなくなった」とまでいう。とはいえ、村民がここに「よくやって来るようになった訳ではない」とすぐにつけくわえる。

私たちの花壇が村で評判になっていることを病友の家族から聞き、それを話すときの彼等の顔の明るさなどから私たちは村人の考えの変ったのを知ったのである。〔中略〕もっともいまわしかった場所がいつのまにかもっとも美しいところになってしまっていて愉快だった。

とも記されている。「庭作り」の石垣積みで「指を一本犠牲にしてしまった」「私」だったが、それもまた「村人の頑固な考えを変えた代償だと思えばまことに安いものである」との納得も記されている。

さきにわたしは、本稿で用いる〈変現〉が「私」ひとりについてだけでなく、「私たち」にもあてはまるようすが本書に記録されていると書いたのだが、さて、さきに引用したところにみえる「美しい」「愉快」とはだれの感じたところなのだろうか。それが「私」ひとりの得手勝手ではないといい切れるのかどうか。

「私たちの存在」が変わった、あるいは、「私たちの存在」をみる眼が変わった、というにしても、ここで事態の全面解決となったわけではないのだから、ここに記された転換をよくよく考える手立てを、わたしたちはみつけなくてはならないのだとおもう（それはこの稿では果たせていない）。また、「美しい風景画の中の汚点がそれを引き立てる重要な要素になった」というとき、「重要な要素」がなにを指しているのかも厳密に考える必要がある。「きちんとした服装」だけなのか、美しい花々が咲く花壇のある庭があればよかったのか、と。しかもこの逆転がたんなる裏返しだとしたら、これまたいつか、なにかのきっかけで裏返ってしまう怖れもあるだろう。

「汚点」を清めればよいのであれば、それは「汚点」をそのようにとらえ忌避する感覚や感性をそのまま引き継いでいることとなるはずだ。それでは問題は革まらない。

**あ 4 お 5 き** 「来島以来二年余、私の伝道生活が軌道に乗りだした」ときのある日、突然に「回春病院の病友」がやってきた（154）。「友遠方より来たる。また楽しからずや」／この有名な言葉を私はこのときほどうしみじみと体験したことはない」というのだから、よほど親しい「友」なのだ。このあたりの記述でくりかえし登場する「私たち」とは、「私」とこの遠来の友のふたりだけであって、ほかのものたちは「病友」と記されている。本書ではときに、濃密な交わりを「私」が実感している間柄が「私たち」とみせられる。

それはともかく、彼に口止めをしておいたはずの癩者たちが住まえる「家」のことについてリデルから手紙が来た。療養所の建設、そのための土地の購入はかねてから「私」の望みだったのだが、「家」を建てようとするにより惹起される難儀を想定しただけに、「私」は必要に感じながらも、それを示せなかったのである。その理由が、「浴槽のよろこび」（154）と題された第 19 の章に展開する。

その理由はかんたんというと、法律第 11 号「癩予防ニ関スル件」などの関連法によって

5つの公立療養所ができて以降、沖縄県でも県立保養院を設ける計画を立てたが、候補地住民の反対騒動によって、いずれも実現しなかったからだった。そうした事情をリデルに手紙で伝えると、そのかわりとして「風呂の設備」が提供されたのだった。それがこの章題の謂である。

ただし水事情をふまえると、それを活かすには「私」の拠点を移す必要があった。それにかかわる「気がかり」が示される——「風呂の設備をするには好都合」のところへ「越せば私は畳の上で生活することになり、それでは多くの病友たちの惨めな生活に溶けこまなければならぬと決心したことに反しないか」という疑問が生じた」というのである。「しかし結局、風呂は病友たちへのこの上ない饗応になろうし、〔中略〕越すことによってミス・ハンナ・リデルが案じておられる私の住居の問題も解決するわけになると考えて」、引越しを決意したのだった。

私は嬉しかった。胸が躍った。欲しい玩具をもらったときの子供のように跳ねまわっていた。そして早速湯を沸かして浴槽にとびこんだ。

——こうした「私」の「よろこび」が縷々綴られる。もとより「この風呂は私の身体を清潔にし疲労を癒してくれたばかりでなく、病友たちにとってもまたなくてはならぬものとなり、入浴するたびに皆勿体ない、勿体ないと口癖のようにいったものである」というのだから、「私」ひとりに愉悦をもたらしたのではなかったのだが。

それにしても、「私は母のふところで安らかに眠る嬰兒のように眼をつむって長いこと身じろぎもせず湯にひたっていた」と記すことのできる「よろこび」は、「わたし」をはじめとしたごく少数のものにしか与えられなかったのではないか。「私」自身が案じていたとおり、「それでは多くの病友たちの惨めな生活に溶けこまなければならぬと決心したことに反し」ているはずだ。

わたしは、快楽を貪る「私」を非難しているのではない。ほんとうに「私」にはうれしい贈りものだったろうとおもう。ただその「よろこび」はおそらく湯船の狭さにみあった範囲にひろまるに留まったのだらうともおもう。

あ 4 お 6 き      あたらしい拠点はいいこと尽くめのようで、「何ととっても一番うれしか

ったのは私の使命である伝道にプラスしたことである」と言祝いだ——「便利なので私を訪ねる病友が急に増えた」「この会〔修養会〕はみんなから喜ばれて非常に盛んであった」「時には遠く〔中略〕からも病友たちが集まって〔中略〕隔離地帯は大賑わいを呈した」というぐあい、「同じ苦しみと悩みを持つ者同志が信仰によって救われた証言をしたり聖歌の練習をしたりして互に結び合うこの交りは美しくもまた楽しく、各自のこの上ない励みにもなっていた」と讃えられる。

だが不思議なことに、このあたりの記述に「私たち」の語がまるでみえないのである。この第20の章では、末尾近くになって、「大和くんちゃー」「なんぶち」などと侮蔑の言葉が後から飛んできたり「小石」を投げつけたりする、「子供たちの悪ふざけ」をめぐる記述のなかに「私たち」の語が登場する。こうした「悪ふざけ」に「病友がひとしく迷惑していたので」、「私」は学校に乗り込んで抗議をした。そのときの校長への説明において、「私たちが通ると」と語られ、また異議申し立ての改善がみられて、「学童は急によくなって私たちはみんな喜んだものである」と転じたという。まるで、「悪ふざけ」する「子供たち」をまえにして、それに「ひとしく迷惑」する「私たち」が思い描かれたというぐあいなのだ。

この章には憤慨も記されているが、その元となる難儀もあったのに、「私の沖縄における伝道生活中、一番気分がはりきって楽しかったのは、最近の数年を除けば、修養会の盛んだったこの」ころだと、執筆時に回顧された快樂が末尾に記されてこの章が閉じられた。

**あ 4 お 7 き** 県の保養院設立計画はくりかえし「失敗」した。もはや「私は当局の無能無策に頼ることの馬鹿馬鹿しさを痛感し、自分の力で道を切り開こうと決心した」（第21の章「土地を買う」169）。ではどうするか——「先ず土地を手に入れることが先決問題である」、なぜか——「それ以外に沖縄の病友たちが救われる道はない」から。難儀に満ちた現状の打開をはかるなかで、依然として、救う／救われる、という「私」と「病友たち」との関係が築かれ、「救われる」べき「病友たち」をめぐるのは、「見るにたえない病友たちの不幸」「不幸な沖縄の病友」という現状が「事実」であると提示されるのである。

土地購入に「私」が動きだしたこの章には、「著者が病友たちと共に選んで後遂に愛楽園

創設の基礎をつくった屋我地島の一角（現在愛楽園納骨堂附近）」とのキャプションがついた写真が載せられている（174-175）。

「浮浪病友」のなかからいくにんかを選び、「彼らをして乞食をやめて自活させてみよう」、「助け合ってやれば自活できないはずはない。助け合いの心は信仰を通してすでに芽生えている」という方針とこれまでの成果をふまえて、「信仰によって結ばれた美しい理想郷」が構想されたのである（170）。ただし、土地を買うことは地元住民には県の保養院設置を想起させるだろうから、ことは慎重のうえに慎重を重ねておこなわれたと記されている。

リデルはこの土地購入にはかねてから反対をしていた。だが「私」には、これまでのリデルからの援助資金があり（来島以来毎月 25 円の送金、うち 5 円を貯金）、また沖縄での伝道によって結ばれた人脈があり、土地を購入することができたのだった。とうとう、「後に沖縄救癩の基地になった私の土地」を得て、土地を持つ「私」となったのだった。親しい「病友」と「二人で将来の計画を練ったり、自分の土地に立って理想の夢を追ったりするのが楽しみ」になったともいう。土地を持ち癩者のなかで傑出した「私」を描くこの「土地を買う」と題された章に、「私たち」の語はひとつも記されていない。

ここで「ミス・ハンナ・リデルの逝去」（第 22 の章題。176）が告げられる。死したリデルのまえで、その死を「悲し」む「私たち」が再構築される。リデルにとって癩者は「気の毒な病人たち」「薄幸の人たち」「救済」すべき対象だったと「私」が想像する。

悲しみに打ちひしがれた「私」も祈るなかで、「私の心は急に明るくなって気力がぐぐーっと湧いてきた。ミス・ハンナ・リデルが今までよりも大きな力で私を助けて下さることに気がついたからである」と、自己の〈装填〉が確認され、同時に「勇気を出さなければならぬ、病友たちのために身を投げださなければならぬと私はふるいたった」と、わが心身への力の〈装填〉は救われるべき「病友たち」の像形につながるのだった。

「ミス・ハンナ・リデルの逝去により、私の沖縄救癩熱はばちばち音を立てて火花を散らしてますます燃えさかったのであった」と記すとき、これもまた「私」の〈変現〉のきっかけとなったといえる。

あ 4 お 8 き 「嵐山事件」（184）と題された第 23 の章以降、癩者が暮らす場所をめぐ



って、地元住民がかかわる紛議がだんだんと熾烈となるようすが記録されてゆく。

「県当局は三たび保養院設置を計画」すると地元では「またまた大騒ぎとなった」——「われらを欺くとはけしからん」というわけで、それを観察する「私」は、「彼等はたちまち暴動の民と化してしまった」と記す。ここには、当事者が懸案事項を打開しようとするときに「われら」へと結集し、他方の当事者からすればそれは向こうに位置する「彼等」の形成にみえ、そこに「私たち」というこちらにいるものたちの結合が示されるようすがあらわれている。対峙しあう当事者の登場である。

ただし当初は、地元住民と県当局との事案であって、「病友たちはみな戦々競々の態だった。だが私は病者が直接騒動の渦中にあるわけではなかったから多数の身の不安を感じながらも伝道の仕事は休まず、日常通り各地の病友訪問をつづけるとともにひたすら当局の勝利を祈りつつことの成行きを観察していた<sup>26)</sup>。しかも「私たちのところへは入れかわり立ちかわり警官がやって来て〔中略〕温い言葉をかけてくれたので、県当局は私たちの味方だという実感がわいて心強くもまた嬉しかった」と率直な安堵も記されていた。

「私」の主動によって、不特定者による「私たち」や、警察署長とじかに協議をするふたりの「私たち」が熟慮断行してゆく。だんだんと「私」が現状打開、難儀打破を遂行する企図と攻略をめぐる練達の士となってゆくようすが記録されている。ときに「私」は、集まった「浮浪病友や自宅患者」といった「彼等を前にして改めて事情を説明し協力を求めた」(197)。おおよそこのあたりから本書は、「国頭愛楽園が誕生する」結実へとむかう。「私」が「私たち」を動かす企図と攻略の筋立てとなってゆく。

ただし実際には、「私」は「騒ぎ」をめぐる地元住民との現場や最前線にはほとんど立ってはいなかった。現地の「様子を手に取るように知ることができた」としても(201)。だから、「病友たちに」「病友たちが」「病友たちは」「病友たちを」という記述が頻出する。現場の描写に、「私」も「私たち」もほとんどいないのだ。「私」が現場にいたことを記した近辺には、「私たち」の語がある(211)。このあたりの記述における「私」や「私たち」

---

<sup>26)</sup> 当事者は地元住民、行政当局、癩者の三者であって場面や局面によってこれら当事者のかかわりぐあいが変わってくる。くわえてこの事態をめぐるのは「新聞」が重要な役割を果たすこととなる。当事者の構図は三つ巴+1となる。

の位置はとてもわかりやすい。

あ 4 お 9 き 「屋部の焼討事件」(218)と題された第 26 の章には、「私たち」の語がじつに多く記されている——「それまでも乏しさを分ち合っていたのがますます乏しくなって大変困った。だが乏しさを分ち合うということは人の心を潔くするものである。分ち合うことによって私たちは固く結ばれ、信仰はいやが上にも磨かれ」たというぐあいである。さらにこの章では、現場で「私」が地元住民と対峙する場面もあり、そこには「私たち」が主語となる記述もある。「私たち」に対して激昂する「群集」は、「野獣のようにわめき、吠え、指笛を吹き鳴らし、小屋の壁を叩き割り、もう手がつけられない」(235)、「私は悪魔によってたかっぺいぢめられているようなくやしく悲しい思いでこれを見ていた」(236)——「私たち」(「小羊」231)に敵対する相手は、「野獣」や「悪魔」に喩えられたのである。

破壊された小屋をまえにして、「腹の底からむらむらと燃え上るものを覚えて私はペタル踏む足に思わず力を入れた」——「野獣」のような「悪魔」のような暴力はまた、「私」の〈装填〉のきっかけとなった。

「この暴逆にも」(第 27 の章題。237)ともに向きあうものがあらわれた。たとえばそのうちのひとりが「台湾の癩視察の途次沖縄に立ちよっておられた長島愛生園医務課長林文雄博士」で、「癩研究の権威」であり「<sup>ママ</sup>鹿兒島敬愛園創立とともに初代園長に就任」した経歴を持っていた彼は、「焼討現場」に立ち、県庁の議事堂で職員に向けて、さらに各地で「沖縄救癩について講演」をし、「舌端火を吐く勢で村民の暴逆無道を攻撃」したのだった。その林が離沖後に、「日本 MTL 長島支部から発行されたパンフレット」に寄せた稿がここに転載されている。

「この焼討事件は本土のジャーナリズムを刺激し、有名な婦人雑誌「主婦の友」などは〔中略〕記事のために大きなスペースをさき、沖縄の人々の非人道行為を痛烈に非難した」(242)。それを知った「私」は、「本土の義憤の叫び」に照らして沖縄の現状——県民、村民の「彼等の耳は痛くも痒くもないように見えた」とそれを嘆いた。

あ 5 お 0 き 村民の「迫害」に追われて、「島というほどのものではない。内海に散在

する大巖小巖の一つといった」ていどのところに避難すると、そこでの描写には「私たちが頻繁にみえる。「カルバリー島」と愛称した」その遠望写真、どこかは不明ながら「浮浪病友たちが住んだ自然洞窟の一つ」の写真が載る（第 28 の章「カルバリー島」243）。

水の調達にも苦心する場所ではあったが、「すでに不完全ながら一つの救護所あるいは療養所みたいなものになっていた」そこでの日々をとおして、「療養所建設の<sup>〔マ マ〕</sup>可能がだんだん見えてきたように私には思われた」。「沖縄の救癪を完うするには、是非沖縄に療養所を建てる必要があった」（250）とあらためて決意を固める。

困難があるも事態は好転し、「私の土地三〇〇〇坪を MTL に寄附」、「MTL が相談所移管を申請するや、県はこの機会を待ちかねていたもののように之を受諾」、「県は厚生省に交渉し、ここに国立癪療養所国頭愛楽園が誕生することとなり」、1938 年 2 月 1 日に「沖縄 MTL は、沖縄救癪の先駆的的使命を果して、その経営する相談所を政府に移管した」。ついで、聖書の聖句が引用されて本文の終わりとなる——「凡てのこと働きて益となるを我等は知る」。最後は「我等」を主語とする文をもって閉じられた。

ただし本文には 6 行の「附記」があり、国頭愛楽園開園の年月日（1938 年 11 月 10 日）、それが「今次の大戦で灰燼に帰した」こと、「戦争中私はクリスチャンの故に、また、多くの迫害に会った」こと、「園は灰燼の中からフェニックスのごとく再び羽ばたいた」こと、園内に「信仰の殿堂」が与えられ「信者」数も増えたこと、そして「今私は本当に幸福である」ことが記された。ここでの主語は「私」であって、この 6 行に「私たち」の語はひとつもない。ここにその概略がごくかんたんに示された「愛楽園創立以後については、また、適当な時機にペンをとりたい」との希望がみせられたのだが、それは実現しなかった。

**あ 5 お 1 き** さて、ここで、「私」の「特別な愛情」が向けられたくだんの女性についての記述をおっおこう。第 19 の章に登場した遠来の友は、「私」に彼女の息災を伝えた。じつは、「それは彼に会った<sup>〔マ マ〕</sup>頭初から私が聞いたかったこと」だったのだ。「けれども妙に気が引けて、私は彼女の名を口にすることができないで」いたのだった（156）。

それが第 29 の章でかなりひさしぶり登場した。当時、回春病院から長島愛生園に彼女は移っていて、そこから帰省した「病友」が彼女の伝言を持ってきたのだった。そこには、「も

う結婚します」とあった (259)。

彼女のことは「物語りの進行上ながら書けなかったが、彼女との文通はずっと続いていた」と照れもなく記す。「しかし私はまだ彼女の本心を掴むことができずにいた。あるときは彼女のかすかな恋情を」……………いつもどおりのぐだぐだがつづく。伝言の「もう」の意味についても、勝手にひとりあれやこれや思い悩む。彼女の結婚を知り「後悔と苦悩にうちひしがれた」ものの、「この伝言が彼女の最後の便り」となり、年月が経てば「いつしか私の悩みをうすれさせ、今はすべて遠い昔の夢となってしまった」とふりかえられたのだった。「しかしながら、彼女を思い出すこともまたどんなにか私に力を与えてくれたことだろう」というのだから、確かに彼女がいるということが、「私」にとって〈装填〉のきっかけになっていたのだ。しかも本書の終わりちかくなってようやく、彼女の思い出が<sup>プラス</sup>正の力となったのだった。

本文が終わる 6 ページまえにようやく、「私」はそうした彼女に訣別できたのだった。療養所建設が確かなこととなったいま、もう〈装填〉は不要だといふかのようである。

**あ 5 お 2 き** 本書の奥付だけをみれば、その著者は青木恵哉であり、本書の始まりと終わりをみると、その出生から彼自身が尽力した療養所の誕生までが描かれているので、本書を青木がその半生をみずから執筆した自伝にして療養所開設譚とみるばあいが多いこととおもう。おおむね、その筋立てにそって読者は本書を読み、また、沖縄本島における療養所開設の経緯を知ろうとしたり確かめようとして本書が読まれるのである<sup>27)</sup>。それは、とても素直な読み方だが、本書をただただなぞってみたにすぎないともいえる。

本書はなにか、それにふさわしい読み方はなにか、が問われるのである。

わたしは、本書を、「私」をめぐる恋愛と伝道信仰と企図攻略の三つ巴をその結構とするテキストだととらえた。このテキストは、恋愛において「私」が煩悶に泥むようすをあらわし、伝道信仰においてはその不備も認めながら果される実践をささえる毅然とした精神世界の動態を開示し、そして、療養所開設という課題の実現のための企図攻略をとおして「私」の智謀と果敢を記録したのである。

---

<sup>27)</sup> その典型がこれまた中村文哉の一連の稿。



うだった。

**あ5お3き**　ここで、「私」にとっての癩について考えておこう。彼は癩を生きただろうか。そう目立つ症状や後遺症はあらわれていなかったという彼は、しかし、宿泊拒否にあたり乗船が危ぶまれたり、子どもたちに囃されたり投石されたりする不利益と不快感と被害を体験している。それが治らない病であり、それによる後遺症をからだから消せないかぎり、癩から自己の離脱をはかるにはべつの方途が必要となる。さきに聖書を読んだ彼がそれをきっかけとして、治らない病とともに生きるという展望の確保があった、と記したことを想起しつつ述べると、彼にとっては伝道と信仰に生きること、智謀と果敢さを駆使して療養所開設への企図と攻略を実現に導くことは、癩を生きつつも、その癩をわれから引き離す契機となったのではないだろうか。恋愛もまさに、ふつうに生きるひとであればだれもが経験する他者をめぐる感情と態度であり、しかしそれはわれの「慈母」リデルが禁じたところであるからなおのこと、それに悶え苦しむこともまた癩者ではないものへと化身するための大切な手立てとなったようにおもう。

さて、わたしのこの稿も、本書『選ばれた島』をなぞった叙述となっている。ただし、療養所開設譚をなぞりはしなかった。自分の誕生から稿を起し、国頭愛楽園の誕生をもって稿を閉じた本書は、そう始まりと終わりを定めた話の筋を立て、そこに伝道と信仰、療養所開設にいたる企図と攻略、そして自分自身の恋愛という編み文様へと話の筋を織りあげた書物となったのである。こうした書物を織りあげる力を持ったものは、記述のなかで、自分もふくめた癩者を再配置したのである。わたしは本書をなぞり書きしながら、その再配置の筋を明示してみた。こうしたわたしの本書をめぐる読み方と書き方は、本書の著者をも縛る縄目の筋を解く試みだとおもっている。

本稿の考察はひとまずここまでとして、最後にひとつ、過去をふりかえり、それをまとめた文章として記述することがもたらした幸いをとりあげてみよう。すでに引用した、「体の調子もよくなって病気だということを以前とちがいたまにしか自覚しない、不思議なことだ、有難いことだ」(120)の記述である。病身をときたまにしか自覚しない、病態を忘れられるいくらかの時間があったということだ。

## 附 記

2015 年 4 月 5 日（日）午後、聖日礼拝に集った外来者が乗った船が出るころ、大島近辺の海に霧がでてきた。春先の霧はよくある。ただこのときは、海のうえにだんだんと積もってゆくような霧のあらわれ方がめずらしかった。栈橋をでた船「まつかぜ」が隣の矢竹島をすぎたあたりで霧に隠れてしまった。高松港のビルディングも霧のなか。栈橋と反対



の東海外にゆくと、大島にもだんだんと霧がはいあがっている。北の山が雲海に包まれたようだった。在園者もカメラをかついで、西へ東へと自転車を走らせていた。

翌 6 日（月）も朝から小雨、風もほとんどない。島を霧がおおっていた。隣の女木島もみえない。まえの晩から霧笛がよく鳴っていたので、よもやという予感がそのとおりとなった。高松港に停船勧告が発令され、朝の高松便が欠航となった。庵治港は勧告の対象外ということで、庵治便は動いている。つぎの高松便も欠航。2 便つづけての欠航をわたしは体験したことがなかったとおもう。在園者がわたしの帰りを心配する。

3 月には 19 日の時点で、「1989 年以降の最長記録に並ぶ 4 日連続の〔霧の〕観測となっ

た。高松港の停船勧告も異例の3日連続の発令」となったからだった。このときは、2月に亡くなった在園者の三十日祭がおこなわれる予定で、出席者が高松港で足止めとなってしまった。3日連続の停船勧告発令は「恐らく初めて」のことで記事は伝えた（四国新聞社 SHIKOKU NEWS 2015年3月20日 09:52WEB 配信）。

島の春、朝の霧。燕をよくみかけたこの日、お昼すぎには船の運航となった。